

日中戦争前における徳富蘇峰の日米親交論

——一九三三—一九三七年——

澤 田 次 郎

はじめに

- 一 日米親交論の復活
 - 二 日米親交の条件（Ⅰ）——日本の特殊地位の承認
 - 三 日米親交の条件（Ⅱ）——人種と海軍軍備の平等
- おわりに

はじめに

徳富蘇峰（二八六三—一九五七年）は明治中期から昭和戦後に至るまでの長期にわたって健筆をふるったジャーナリスト、歴史家として知られている。

昭和八年（一九三三）三月、日本は国際連盟に脱退を通告した。それまで常任理事国として活動してきた日本は以後、平和的分野への協力は別として、政治的な分野においては連盟と関係を断つことになる。一方、満洲国

表 1 東日・大毎と他紙の発行部数 (昭和 8～12年)

	東京日日新聞	大阪毎日新聞	毎日合計	東京朝日新聞	大阪朝日新聞	朝日合計	読売新聞
昭和 8 (1933)	1,279,300	1,581,712	2,861,012	844,808	1,041,115	1,885,923	494,311
9 (1934)	1,106,088	1,690,368	2,796,456	885,007	1,138,482	2,023,489	577,374
10 (1935)	1,157,683	1,728,053	2,885,736	913,342	897,594	1,810,936	667,790
11 (1936)	1,188,059	1,275,846	2,463,905	1,011,190	861,334	1,872,524	759,149
12 (1937)	1,432,185	1,414,937	2,847,122	1,042,188	940,555	1,982,743	885,469

- (注 1) 東日、大毎は、社史編纂委員会編『毎日新聞七十年』(毎日新聞社、昭和27年)、612 - 613頁の「毎日新聞発行部数表」による。両紙とも 1 月 1 日の部数。大毎は昭和10年から西部(門司)、中部(名古屋)でも印刷を開始したが、その部数は含めていない。これを入れると、昭和11、12年の毎日合計は、2,967,227、3,448,880部となる。
- (注 2) 東朝、大朝は、山本武利「近代日本の新聞読者層」(法政大学出版局、1982年第2刷)、410 - 411頁の「別表 4 『朝日新聞』の発行部数」による。同表の註によると、東朝は 1 月 15 日、大朝は 5 月 20 日の部数である。大朝は昭和10年から九州、名古屋支社が独立したが、両支社の部数は含めていない。
- (注 3) 読売は、社史編纂室長岡野敏成編『読売新聞八十年史』(読売新聞社、昭和30年)、冒頭折込み及び371 - 373頁の発行部数表による。同表の註によると、11月10日の有代発行部数である。

の境界線確立を目指す関東軍は長城線を越えて関内作戦を開始し、北平(北京)に迫った結果、国民政府は停戦を余儀なくされ、五月末、日本と中華民国の間に塘沽停戦協定が成立し、満洲事変は事実上終了した。その後、昭和八年六月から日中戦争が始まる十二年七月までの四年間、日本とアメリカの関係は第一次上海事変を頂点とする「一九三二年の日米危機」⁽¹⁾ 当時と比較すれば落ち着きを見せ、日本国内ではかつての親米感情が復活の兆しを示し、両国の関係改善をはかる交流が行われた。しかしその一方で昭和八年から九年にかけて「一九三五～三六年の危機」説が軍部から発信され、メディアを通じて増幅された結果、言論界の一部には日米戦争を予期する見方がわずかに残ることになる。⁽²⁾

そうした中で蘇峰は七十代前半の年齢に達していたが、ジャーナリストとしての活動は依然として精神的であり、論壇の長老としての権威、影響力はそれまで以上に大きかった。この時期、彼は『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』(昭和十八年、『毎日新聞』

表2 徳富蘇峰の講演活動（昭和8年6月1日～12年7月6日）

年	月日	講演題目	講演会名	主催	会場
昭和8年	7月5日	不明	蘇峰会東豆支部発会式	蘇峰会東豆支部	静岡県伊東町
	8月上旬予定	明治維新の大業(連日3時間予定)	国民教育奨励会主催岳麓夏期大学	国民教育奨励会	
	10月4日	日本帝国に於ける名古屋市の地位	名古屋市庁開庁記念講演会	名古屋市	名古屋市庁
	10月8日	不明	信長公三百五十年祭		摠見寺(滋賀県安土町)
	10月10日	(大東文化の精神について)	(斯道会創立五年を祝す講演会)	斯道会(池谷観海会長)	沼津商工会議所
	12月5日	忠勇顕彰会と日本精神	忠勇顕彰会創立三十年記念講演会(ラジオ全国放送)		青山会館
昭和9年	1月1日	歴史の流れを通じて観たる昭和の御代の日嗣皇子の御降誕	(ラジオ講演放送)		東京中央放送局
	2月6日	非常時に対する吾人の覚悟	日本精神作興大会	大毎・東日	日本青年館
	3月13日	建武中興の大義	建武中興六百年記念祭典	大毎・東日	日本青年館
	3月15日	昭和青年の使命	全国優良青年大会	大毎・東日	宇治山田市公会堂
	3月26日	(農業は国家の基本である点についてか)		農民講道館(横尾惣三郎館長)	農民講道館(埼玉県与野町)
	3月29日	勝海舟先生に就て	洋々会第百回例会	日本クラブ洋々会	
	4月〔日不明〕	日本精神の本体	全国小学教員代表者大会		東京・青山師範講堂
	5月13日	日本精神の発揚			

昭和10年	6月4日	歴史上より観たる東郷元帥 不明	(ラジオ講演放送) (商業会議所での蘇峰会支部 部発会式後、会場を移して 実施)	可睡斎	東京中央放送局 豊橋市公会堂
	6月9日				
	6月13日	(道元禅師について)			可睡斎(静岡県袋井町近 郊)
	9月15日	日支間の連鎖としての仏教 修史告白	東亜調査会講演会 近世日本国史五十卷(普及 版)刊行記念披露会	東亜調査会	東京日日新聞社講堂 帝國ホテル
	9月28日				
	10月5日	人間学としての歴史	近世日本国史五十卷刊 行記念講演会	蘇峰会主催・東日 後援	青山会館
	10月16日	日本精神の基調として皇国固有の勇 気を論ず		熱田神宮	名古屋市公会堂
	10月18日	歴史家ならざるもの、歴史の興味 和を以て貴しと為す	近世日本国史五十卷刊 行記念大講演会	蘇峰会大阪支部主 催・大毎後援	中之島公会堂
	10月20日				
	10月22日	竹田先生の日本文化に於ける感化と 功德	書聖田能村竹田先生百年 祭記念講演会	興風会	福岡県八幡市 大分県竹田町公会堂
	12月3日	東洋平和の番人たる日本の国防	(ラジオ講演放送)		東京中央放送局
	1月6日	明治大帝御製謹講、第六日	(ラジオ講演放送)		東京中央放送局
	1月19日	日本歴史と婦人			
	2月2日	不明	(陸軍大学校学生を対象)	桜蔭会	東京日日新聞社講堂
	2月11日	歴史上に於ける日本婦人	日本女子大学紀元節祝賀		日本女子大学

5月22日	(郷土愛と地方自治について)	仙台藩祖伊達政宗公三百	宮城県桃生郡北村小学校
5月23日	日本歴史上に於ける伊達政宗公の位置	東京日日新聞社、 藩祖公三百年祭協 賛会	東北帝国大学法文学部講
6月16日	佐久間象山先生と昭和の教育	信濃教育会	長野市
6月27日	論語を通じて観たる孔子	蘇峰会横浜支部	横浜銀行集会所
7月25日	国史を通じて観たる国体	蘇峰会横浜支部発会式 (ラジオ講演放送)	東京中央放送局
8月25日	不明	蘇峰会支部(谷村町)発会式	山梨県南都留郡谷村町の 小学校講堂
9月20日	近代人としての織田信長	名古屋経済会	名古屋市商工会議所
9月21日	世界史より観たる日本帝国が世界に及ぼしたる影響	青年団、在郷軍人会	名古屋市公会堂
9月24日	日本国史より得たる教訓	富山県教育会	西本願寺別院本堂(富山 市)
9月28日	明治維新と昭和維新	石川県教育会及び 石川郡支部教育会	石川県石川郡松任小学校
10月3日	日本の最近世史に於ける英国と露国	中央公論社創立五十周年 記念講演会	軍人会館(東京市麹町区)
10月8日	三條実方公、三條実美公の事蹟に就 て	三條実方・実美両公記念 講演会	山口仏教会館(京都市)
10月10日	新島精神と日本精神	同志社創立六十年 期講演	同志社大学

5月19日	大日本帝国の運命と日本女性の責任	国防婦人デー び同クラブ発会式	大毎博覧会、大日	甲子園球場
5月18日	地方的個性の存養	大阪談話クラブ晩餐会及	大阪談話クラブ	大阪ガスビル
5月15日	我が大日本帝国は何を以て世界に寄与せんとする乎	蘇峰会豊橋支部座談会 名古屋市教育会総会	蘇峰会豊橋支部 名古屋市教育会	龍拈寺(豊橋市) 名古屋市公会堂
5月14日	皇国の現状を眺めて	蘇峰会島田支部発会式	蘇峰会島田支部	静岡県立島田商業学校講堂
5月13日	(皇室中心主義の重要性と時局批判)	蘇峰会島田支部発会式	蘇峰会島田支部	東京中央放送局
5月4日	小学生の時間(全学年)朝礼「訓話」	(東京市内の小学児童向けラジオ放送)	東京中央放送局	東京中央放送局
4月3日	御親閲所感	全国聯合小学校教員会御沙汰拝受記念会	中央義士会	青山会館
12月14日	不明	不明	部、蘇峰会	日比谷公会堂
12月7日	政治家としての西郷南洲先生	救世軍四十周年祝賀会	国史会、三洲俱樂部	青山会館
11月27日	不明	不明(蘇峰会在京会員大会を兼ねる)	国史会、三洲俱樂部	青山会館
11月19日	不明	不明	国史会、三洲俱樂部	新宿中村屋三階ホール
11月16日	日本を偉大ならしむる道	不明	国史会、三洲俱樂部	静岡市公会堂
11月3日	明治節と明治天皇の御聖徳	(中村屋店員一同を対象)	国史会、三洲俱樂部	東京中央放送局
10月15日	頼山陽と大阪及び京都	救世軍四十周年祝賀会	国史会、三洲俱樂部	青山会館
10月13日	(皇室中心主義の重要性について)	蘇峰会奈良支部発会式	蘇峰会奈良支部	奈良公園内公会堂
10月15日	頼山陽と大阪及び京都	蘇峰会奈良支部発会式	蘇峰会奈良支部	奈良公園内公会堂
10月15日	頼山陽と大阪及び京都	蘇峰会奈良支部発会式	蘇峰会奈良支部	奈良公園内公会堂
10月15日	頼山陽と大阪及び京都	蘇峰会奈良支部発会式	蘇峰会奈良支部	奈良公園内公会堂
10月15日	頼山陽と大阪及び京都	蘇峰会奈良支部発会式	蘇峰会奈良支部	奈良公園内公会堂
10月15日	頼山陽と大阪及び京都	蘇峰会奈良支部発会式	蘇峰会奈良支部	奈良公園内公会堂

昭和12年	1月7日	五箇条の御誓文に就て いて)	(ラジオ講演放送)	横須賀市教育会	東京中央放送局
	12月5日	油断大敵 (人民戦線、ファッシヨ、皇道につ	蘇峰会清水支部発会式 蘇峰会横須賀支部発会式	蘇峰会清水支部、 蘇峰会横須賀支部、 横須賀市教育会	清水商業学校講堂 横須賀鎮守府下士集会所
	11月23日				
	11月22日	明治維新大業の完成と昭和の青年	(青年団令旨奉戴式後の講 演) 講演会	名古屋連合青年団	名古屋市公会堂
	11月21日	国民戦線、人民戦線と我が皇道精神	大毎東海躍進一周年記念 講演会	大毎名古屋支局	名古屋市公会堂
	11月20日	所感	蘇峰会浜松支部主催講演 会	蘇峰会浜松支部	浜松市公会堂
	11月1日	不明 書籍及読書	蘇峰会奥多摩支部発会式 東京出版協会・東京書籍 商組合連合の図書祭	蘇峰会奥多摩支部	一ツ橋会館
	10月5日				
	9月10日	尊き鮮血・徒爾たらしむるな	成都遭難新聞記者追悼講 演会	東日・大毎	日本青年館
	9月8日	(追悼講演)	床次竹二郎氏追悼会		芝公園三縁亭
8月16日	私の二つの念願	蘇峰会大宮支部発会式	蘇峰会大宮支部	静岡県大宮町	
5月31日	世界の模範国としての大日本帝国	会並びに蘇峰会埼玉支部 発会式		浦和	
5月23日	不明	蘇峰会岡山支部発会式	各本部連合	岡山市内の図書館	
		埼玉県教育団体連合会総 会並びに蘇峰会埼玉支部 発会式	蘇峰会岡山支部		
			本国防婦人会近畿		

1月8日	同右	(ラジオ講演放送)		東京中央放送局
1月17日	(勝海舟と西郷隆盛について)	(東京・洗足池畔の蘇峰詩 碑除幕式後の報告式)		清明文庫(東京市大森区)
2月10日	日本国史と日本国民の自覚	建国記念講演会	大阪府	中之島公会堂
4月16日	昭和青年の進路	第四回全国優良青年大会	東日	日本青年館
4月22日	西郷南洲の新面目	経済倶楽部招待晩餐会	名古屋市公会堂	名古屋商工会議所新館
4月24日	近世日本の先駆者としての信長、秀吉、家康	全国連合青年団大会		
5月6日	昭和日本の進路	蘇峰会弘前(または青森 思)支部発会式	蘇峰会弘前(また は青森県)支部	弘前市公会堂
5月9日	維新史に於ける会津	蘇峰会会津支部発会式	蘇峰会会津支部	若松市公会堂
5月11日	精神日本の建設	蘇峰会二本松支部発会式	蘇峰会二本松支部	福島県立安達中学校

(注1) 『最近の蘇峰先生』(蘇峰会、昭和十七年十一月)巻末の「蘇峰先生動静」、『東京日日新聞』、『蘇峰会誌』、早川喜代次『徳富蘇峰』(徳富

蘇峰伝記編纂会、昭和五十四年第二版)、徳富猪一郎『史論新集』(民友社発行、明治書院発売、昭和十一年四月)、相馬基編『危機線上の日支』(東京日日新聞発行所、大阪毎日新聞社、昭和十一年九月)、徳富猪一郎『老記者の旅』(民友社発行、明治書院発売、昭和十二年五月)などより作成。

(注2) 原則として挨拶、謝辞、祝辞、答辞、弔辞、卓辞、訓辞、講話、談話、座談、質疑応答の類は多数のため省略した。

(注3) 講演時間は通常、約一時間半程度にわたる場合が多い。

(注4) 蘇峰会支部発会式には市長、町長をはじめとする地元の名士が参列する場合が多い。

(注5) 東京日日新聞社は東日、大阪毎日新聞社は大毎と略した。

に紙名統一)の社賓(重役待遇)として連日、両紙夕刊の第一面にコラムを掲げていた。⁽³⁾表1に見るように満洲事変後から日中戦争前にかけて東日、大毎の発行部数は合わせて二四〇万から二八〇万以上という膨大な数に達

表 3 ラジオの受信者(聴取契約者)数と100世帯あたりの普及率

年 度	昭和 8 年 (1933)	昭和 9 年 (1934)	昭和10年 (1935)	昭和11年 (1936)	昭和12年 (1937)
受信者数	171万4,223	197万9,096	242万2,111	290万4,823	358万4,462
普及率	13.4%	15.5%	17.9%	21.4%	26.4%

- (注1) 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上巻』日本放送出版協会、昭和40年所収の図表「ラジオの年度別 全国受信者数・普及率」より作成。
- (注2) 上記は全国ならしての普及率であるが、都市部だけに限定すると、例えば昭和9年度には東京49.8%、大阪36.3%、京都26.8%、愛知23.9%、神奈川23.7%の普及率を示している(前掲書所収の図表「ラジオの都道府県普及率ベストテン」を参照)。

し、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』(昭和十五年、『朝日新聞』に紙名統一)とともに「二大新聞」といわれるまでに成長を遂げたが、実際には朝日を引き離して首位の座にあった。蘇峰はそうした勢いに乗るマスメディアを舞台として持論を展開したのである。⁽⁵⁾ 加えて雑誌においては、知識人向けの『中央公論』『改造』『日本評論』、大衆向けの『キング』、女性向けの『婦人倶楽部』『婦人公論』から経済誌『実業之日本』、専門誌『歴史公論』『古典研究』に至るまで幅広く登場、寄稿している。⁽⁶⁾ さらに講演については表2に示したように、国内各地の大小様々な会場、もしくは全国に相次いで結成されつつあった「蘇峰会」支部においてくり返し行っている。⁽⁷⁾ その中にはNHKラジオ放送でのスピーチも含まれるが、正月や明治節といった祝祭日に加えて、東郷平八郎元帥の国葬(昭和九年六月)、ワシントン条約単独廃棄の閣議決定(同年十二月)、満洲国建国三周年(昭和十年三月)といった重要な節目に選ばれ、マイクの前に立っていることがわかる。表3に見るように、その頃ラジオの受信者(聴取契約者)数は一七一万から三五八万以上へと拡大する途上であり、ここでも彼はやはりマスメディアを用いて大規模に自説を広めることができた。

右のように有名ジャーナリストとして幅広く活躍する蘇峰は、同時に「文豪」「先生」として畏敬される存在であった。⁽⁸⁾ 幕末生まれの彼とはほぼ同世代の人物としては、夏目漱石(大正五年没)、森鷗外(大正十一年没)、内村鑑三(昭和五年没)、新渡戸稲造(昭和八年没)らがいるが、そうした人々が相次いで世を去る中で、蘇峰

は国民への教育を企図した著作をなお次々と生み出していった。⁽⁹⁾ また東日・大毎に「近世日本国民史」を連載していた彼は、⁽¹⁰⁾ 昭和九年にそれを単行本化した『近世日本国民史』全百巻のうち第五十巻までの刊行を達成し、さらに十一年には出世作となった『将来之日本』の出版（明治十九年）以来、五十年目の節目を迎え、「文章報国五十年」を貫く偉大な文筆家、歴史家であると各界リーダーから高い評価を受けた。⁽¹¹⁾ そうした賛辞を寄せた一人に大日本雄弁会講談社の社長・野間清治がおり、彼が以下のように述べていることは興味深い。すなわち、徳富先生の教化力が偉大であることは他に比がなく、自分も「若い頃」蘇峰先生の文章を愛読、暗誦していつの間にかそれを血肉とした。私の頭の大部分は徳富先生によってできている。先生はそのような覚えはないといわれるかもしれないが、自分は「先生の門下」「教へを受けた弟子」であることを常に誇っている、と野間はいう。⁽¹²⁾ 昭和戦前期の日本国民に講談社が「私設文部省」といわれるほど多大な影響を及ぼしたことは知られているが、⁽¹³⁾ その講談社を率いる野間を「育て上げ」たともいえる存在が蘇峰であった。⁽¹⁴⁾

このように蘇峰は単にベテランの著名ジャーナリストであるだけでなく、国民の仰ぐべき師表といふべき存在であり、それだけに公の場で日本の文人を代表する役割を与えられることが少なくなかった。例えば昭和九年、東郷平八郎元帥の国葬が行われた際、蘇峰はラジオ講演を行うだけでなく、砲車に乗せられた元帥の棺の側を歩む十八名の一人（左側先頭）⁽¹⁵⁾ に選ばれている。陸海軍の将官以外にこれを務めたのは、蘇峰と平沼騏一郎（枢密院副議長）⁽¹⁶⁾ だけであった。また昭和十年四月、満洲国皇帝・愛新覚羅溥儀が来日した際、蘇峰が単独で謁見する機会を与えられたことは知られている。⁽¹⁶⁾ このとき満洲国建国に貢献した官僚、軍人十数名とともに赤坂離宮に招待された彼は、善隣書院を創設して日華親善に努めた宮島大八とともに二人で溥儀に拝謁し、さらに宮島が別室に退いた後、その場に残され、溥儀から「[同日朝刊に掲載の] 徳富先生の歓迎の辞は、一々同感である、両国が東洋道義の精神で一致し、利害を超えて結合するよう希望する」との言葉を得て「恐懼」「感激」することになっ

た。⁽¹⁷⁾

右に見るように言論人の代表とされ、それに応じた舞台を用意された蘇峰は、国内で様々な重要事件が起こるたびにコメントを残している。例えば昭和八年九月、五・一五事件の陸軍側判決が出される直前、かねてから政党政治家の政争と腐敗を憤っていた彼は、事件の被告を「身命を擲つて、所信に殉ぜんと期したるの士」と呼び、法廷での彼らの陳述に「我等は溜飲三斗を下した」として被告側の動機に共感を示した。⁽¹⁸⁾ 同様に九年十一月、血盟団事件の判決が行われた際も、死刑でなく無期懲役以下の実刑を下した藤井五一郎裁判長に強い感謝を表明し、もしこれ以上の酷刑となれば井上日召以下の「一死報国の丹誠」は没却されることになる、彼らが直接行動を決心するに至ったことには深い理由と事情があるのだとして同情を示した。⁽¹⁹⁾

当時の日本では、蘇峰のように五・一五事件や血盟団事件の実行者を、法秩序の侵犯者として糾弾するのでなく憂国の至情の持主として擁護する風潮があったことはよく知られている。ここになぜ蘇峰が人気を博したか、その理由の一斑が隠されている。国民新聞社時代、彼の下で働いた経験のあるジャーナリスト馬場恒吾がいうように、蘇峰は「多情多感の人」で、「時代の要求を察する感覚」が鋭敏な人物であった。⁽²⁰⁾ 言葉を換えれば国民のムードを読み取り、それを情熱的に代弁する、あるいはムードの赴く方向を予測し、国民よりも一歩先んじてこれを力強く主張することに長けていた。そのため読者は彼の文章を読むことにより、自分の感じていることを明瞭に言い表してくれた、あるいは日本が向かう道筋を明確に指し示してくれたという喜びと安堵を味わうことになる。逆にいえば蘇峰は、かつて日露講和を主張して日比谷焼討事件に遭ったようなケースがあったものの、大衆の耳に痛いこと、意にそぐわないことを口にすることが少なかった。これが蘇峰の人気最大の理由であったと考えられる。⁽²¹⁾

以上のように有力な言論人であり、日本の進む方向に敏感な蘇峰は、国際連盟脱退通告後、日本外交の問題は

「第一米国、第二露国、第三支那」であると述べている。⁽²²⁾ アメリカが日本にとって最大の懸案だということである。冒頭で述べたように当時の日米関係は比較的落ち着きを取り戻していたが、それにもかかわらずアメリカが第一の問題であるというのはどういうことであろうか。本稿では対米戦争へと傾斜する前段階において、蘇峰の対米認識がいかなるものであったかを明らかにしたい。考察時期はフランクリン・D・ローズヴェルト (Franklin Delano Roosevelt) の大統領就任 (昭和八年三月) 直後、満洲事変が終了した昭和八年五月末から日中戦争の発端となる蘆溝橋事件が生じた昭和十二年七月までとする。この約四年間における蘇峰のアメリカ観を検証した先行論考は、管見の及ぶ限りではほとんど存在せず、本論はそうした研究上の空白を埋めるものである。

一 日米親交論の復活

日中戦争前、昭和八年から十二年にかけて日米関係は天羽声明 (昭和九年)、ロンドン軍縮予備会商 (同九年) と第二次ロンドン海軍会議 (同十年) をめぐる一時期を除いて、基本的には緊張緩和を見せた。昭和八年六月、外務省と米國務省の間で日米調停仲裁裁判条約の予備交渉の手順が整えられ、外務省がこの条約により「日米親善」に拍車をかけ、「日米戦争の災禍を未然に防止」したいとの意向をもっていることが明らかにされた。七月には、日本から帰国したばかりのスクリップス・ハワード (Scrapps Howard) 系新聞事業家ロイ・W・ハワード (Roy Wilson Howard) が傘下の新聞紙上で、日米関係改善のためには排日移民法の修正から着手すべきだと主張し、日本のメディアから歓迎された。⁽²³⁾

昭和九年には広田弘毅外相の対米関係改善のキャンペーンが行われ、コーデル・ハル (Cordell Hull) 國務長官との間で交換された非公式メッセージが公表された (二、三月)。その中で広田は、日米には友好の歴史があ

り、平和的手段と相互理解によって解決できない問題はないとし、日本はいかなる国をも狙っていないことを付け加えた。これに添えてハル国務長官は、アメリカも友好的の精神の中であらゆる問題が解決されることを望むとし、他の国々の領土に攻撃的な狙いを抱く国がないことは喜ばしいと返答した。²⁴ さらに同じ九年には、日米和親条約調印八十年を記念した第一回黒船祭りが下田で開かれ、現地を訪ねたジョセフ・C・グルー (Joseph Clark Crew) 駐日大使夫妻が日米両国の小旗を振る小学生の歓迎を受けた (四月)。²⁵ その他にも日米スポーツ交流が盛んに行われ、野球では賀陽宮恒憲王、敏子妃のヤンキー・スタジアムでの試合観戦 (八月)、ハーヴァード大学と日本の諸大学 (八月)、メジャーリーグ選抜と大日本東京野球倶楽部 (十一月) の対戦が日本で実施され、ベーブ・ルース (George Herman "Babe" Ruth) が来日したほか、陸上競技でも明治神宮外苑競技場で日米対抗試合 (九月) が行われ、ラルフ・H・メトカルフ (Ralph Harold Metcalfe) が二〇〇メートルで世界記録を更新した。ハーヴァード大対東京帝国大学の試合では、始球式で松田源治文相が投手、グルー大使が捕手を務めるなどの交歓風景が見られた。²⁶ また貴族院議長・近衛文麿の訪米 (六月) や第一回日米学生会議の開催 (七月、於青山学院) などに見られるように、政府間の公式ルート以外に日米間のコミュニケーションを図る動きも見られた。²⁷

昭和十年には、竹下勇海軍大将 (後備役) と二宮治重陸軍中将 (予備役) が帝国在郷軍人会を代表してアメリカの第三六回在郷軍人大会 (九月、於ニューオーリンズ、36th National Encampment of Veterans of Foreign Wars of United States) に参加している。出発前、竹下大将は、この大会自体が平和を使命とするものだから日米在郷軍人の握手を図る上で一番良い機会だ、大会終了後にはワシントン、ニューヨーク、シカゴその他の主要都市を訪問して「日米の真の理解のために尽したい」と述べている。その後、約二カ月余りを経て帰国した竹下は「なかなか愉快な旅じゃったよ。日米間には一点の暗雲もない。……米国各地の排日気分も大分鎮まって来た。米人の戦争を嫌う感情は極端な平和愛好心となって現れている。今回、米国老兵会がわが帝国在郷軍人会に呼びかけ

て来たのも平和運動の一つの現れで、実戦の経験をもつ両国老兵達が相協力し、日米親交、平和の維持に努めようとの精神に他ならぬのじゃ」と語っている⁽²⁸⁾。

昭和十一年になると右のような交流は低調となるが、翌十二年にはヘレン・ケラー (Helen Adams Keller) が来日し (四月)、盲人の社会事業家・岩橋武夫をはじめとする障害者福祉関係者など多くの人々から歓迎を受けた。このときケラーは皇居での観桜会にも招待され、天皇、皇后から握手と言葉を得ている⁽²⁹⁾。またその訪日に先立ち『ヘレン・ケラー全集』第一―三巻、『聖女へれん・けらあ』『ヘレン・ケラー小伝』『聖女ヘレン・ケラーとはどんな人か』といった書籍や冊子が相次いで刊行され、彼女への関心が高められた⁽³⁰⁾。以上見た他にも昭和八年から十二年にかけては、チャールズ・チャップリン (Charles Spencer Chaplin, Jr.) の「モダンタイムス」⁽³¹⁾ (‘Modern Times’) をはじめとするハリウッド映画が日本の庶民の心をとらえており、今日からそうした世相を振り返ると少なくとも表面的には、それから十年を経ないうちに日米戦争が生じることはむしろ意外な感を与えるほど、日米間の緊張は解けつつあるかのように見えた。

そうした中で蘇峰も日米親善を支持する意見を何度も公にしている。例えば昭和九年、日米間の親善回復の動きを見た蘇峰は、「それが等閑に終わらないことを祈る」として上で、以下のように述べている。

我等は日米の親和は、決して難題ではないと思ふ。元來両国の間に、何等利害の両立し難きものは無い。寧ろそれよりも、双方の利害が、共通す可きもの、十に八九である。彼は棉花を供給し、我は生糸を供給す。彼は石油を供給し、我は緑茶を供給す。所謂有無相ひ通ずるもの、未だ現在の日米ほど、切実なるものはあるまい⁽³²⁾。

貿易上、日本とアメリカは補完関係にあり、利害の共通性から考えて日米親和が難しいわけではないというので

ある。また昭和十一年にも蘇峰は、日米間の貿易総額一三億五、〇〇〇万円のうち八億円以上が米国より日本へ向けた輸出であり、「此の一事を見ても、日米の戦争杯は思ひも寄らぬことではない乎」と強調している。⁽³³⁾このように貿易面から見て国家間の親和とその利点を説く考え方は、同志社英学校時代にドワイト・W・ラーネッド (Dwight Whitney Learned) から経済学を習って以来、蘇峰にしばしば見られるものであった。⁽³⁴⁾しかしながらその一方で、昭和八年、日米未来戦争論は下火となったものの、なお言論界の一部に残り、同年夏から翌九年春にかけては日ソ戦争論がジャーナリズムを賑わせることになる。⁽³⁵⁾そうしたウォー・スケアの燃え上がりを憂えた蘇峰は以下のように記している。⁽³⁶⁾

……現今に於ては、某国と戦争とか、某国の来襲とか、宛も眼前に戦争が爆発するかの如き文句さへも容易に使用さるゝこととなつた。

……不謹慎なる文句を濫用し、徒らに他国の神経を刺戟し、痛くなき腹を、自から好んで探らるゝが如き言動を逞しくするは、果して智者の業なる乎、否乎。若し斯る文句を濫用せねば、国民の国防心を喚起する能はずとする者あらば、そは餘りに我が国民を侮辱する者だ。

仮りに隣国との干繋が、切迫し来れりとすれば、愈よ倍々我等の言動は、自制を加へ、節度を加へ、考慮を加へ、謹慎を加へねばならぬ。此れが我国本来の武士道だ。

右のように蘇峰は述べている。ここで俎上に載せられているのは、時期からいって日ソ戦争論も含むであろうが、同時にその前年に噴出した日米戦争論も彼の念頭に十分置かれていたであろうと考えられる。⁽³⁷⁾このように蘇

峰は日ソ、日米未来戦論を批判し、それを喧伝する自国のメディアを戒めた。それと同時に彼が案じていたのは、ヨーロッパの動きである。欧州諸国は「第一次」世界大戦で多くの利益を得た日本とアメリカを妬んでおり、そのため日米を挑発し、疑心暗鬼の状態に陥れ、戦争に仕向けようとするのではないかというのである。このように懸念した彼は次のように説いている。

日米戦争は、両国に取りて、両損ありて一得なし。但だ若し之を希望する者あらば、それは第三者⁽³⁸⁾だ。

第三国の煽動という問題を考えると、アメリカは政治の重要事項が「街頭の輿論」、すなわち大衆の気まぐれとそれに対する政治家の迎合によって左右されがちな国であるから油断ができない、米国人は他国の挑発を警戒しなければならぬと蘇峰は忠告している。⁽³⁹⁾ 三国干渉とヴィルヘルム二世 (Wilhelm II, Friedrich Wilhelm Vic-
tor Albert von Preußen) の黄禍論以来、ドイツに不信感を抱く彼は第一次大戦当時、ドイツの煽動によって日米戦争勃発のムードが醸成されることを危惧したが、⁽⁴⁰⁾ そうした悪夢はその後も彼の心から消えることがなかったのである。

日米戦争に基本的に反対であるという蘇峰の姿勢はその後も変わらず、「日米の間に、何等戦争せねばならぬ理由もなく、問題も無い」と念を押し、お互いに疑心暗鬼となったり、第三者の離間中傷に乗らないよう両国は顧慮すべきであると、それまでの意見をくり返し述べている。⁽⁴¹⁾ さらに昭和十二年、日中戦争が生じる直前に、武藤貞一『世界戦争はもう始まつてゐる』を読んだ彼は、将来の戦争で想像を絶する新兵器が用いられる可能性があるという指摘に注目していた。⁽⁴²⁾ 同書によると、これからの戦争ではベスト、コレラ菌を散布する細菌弾、殺人光線・音波の使用、時速七〇〇キロ以上の爆撃機数百による空襲があり得るのであって、第二次大戦が起これば

第一次大戦を兎戯に等しくするほどの大量殺戮が行われるだろうという⁽⁴³⁾。それに対して蘇峰は以下のように慨嘆した。

何人も之を読めば、戦争など手軽く口にす可きものでなく、又た容易に目論む可きものでなく、又た兎狩や、猪狩りのつもりにて、乗り出す可きものではないことが判る。今日の戦争は、実に言葉通りに、生霊を鑿〔みなごろし〕にする、大仕掛の作業であることが判る⁽⁴⁴⁾。

しかしながら同書によると、ロシア、イギリス、アメリカの三国は虎視眈々と日本を見つめており、三者のいずれかが刀を抜いたら、それを契機に他の二国も日本へ襲いかかろうと準備しているという。対日戦に備えるソ連は樺太対岸からウラルまでの広大な地域を武装化、軍需工業地帯化し、シナは民衆に熾烈な抗日思想を注入しつつ特に空軍を強化し、英国と米国は太平洋での共同作戦をもくろんでおり、米国の渡洋作戦計画はフィリピン防衛だけでなく日本本土への攻撃まで想定するようになっていて、そうした中で日本は「陸と海とからの襲撃に備へねばならぬ」と同書は⁽⁴⁵⁾いう。これを読んだ蘇峰は次のように記した。

如何に無鉄砲なる、武田勝頼流の猪武者でも、陸上に於て蘇聯と支那を敵とし、海上に於て英米を敵として、同時に戦端を啓かんなどと謀企する者はあるまい⁽⁴⁶⁾。

しかし問題は外交であると蘇峰は考えた。拙劣な外交は味方を敵とし、巧妙な外交は敵さえも味方にすると彼はいう。「第一次」大戦前のドイツは独りよがりとなって英露を敵とし、同盟国イタリアさえも頼みにできなく

なったが、その結果、周囲をクモの網のように取り巻かれ、身動きのとれない状態となった。その前例に注意せよというのである。⁽⁴⁷⁾このように蘇峰は日本が国際的に孤立し、大陸国ソ連、中華民国、海洋国イギリス、アメリカのすべてを敵に回すような愚を避けるため、外交に細心の注意を払うよう促した。

以上のように蘇峰は、言論を通じて日米親善を支持し、戦争に反対したが、筆をとるだけでなく、行動によっても意思表示を行っている。昭和九年九月十八日、スクリップス・ハワード系のジャーナリスト、ローウェル・メレット (Lowell Mallett) を団長とするアメリカ新聞記者団十二名が訪日した。一行は翌十九日午後、丸の内東京会館で開かれた日本新聞協会主催の臨時大会に出席したが、このとき蘇峰は同協会の名誉会員として東久邇宮稔彦王総裁、清浦圭吾会長、光永星郎理事長以下の会員百五十余名とともにこれに参加している。さらに同日夕方、同じ場所でアメリカ新聞記者団の歓迎晩餐会が開かれ、岡田啓介首相と閣僚も加わり、来会者は四百名以上に達したが、蘇峰はこれにも出席し、清浦会長の歓迎の辞、光永理事長の報告、岡田首相の祝辞につづいて挨拶を行っている。⁽⁴⁸⁾『東京日日新聞』はこの歓迎晩餐会の模様を「日米国交上にも寄与すること多い有意義な大晩餐会」であったと報じており、⁽⁴⁹⁾そうした会で日本側の代表者の一人としてスピーチした蘇峰は日米交流の一端を担ったといつてよいであろう。ただしそうであるからといって、彼は無条件の日米親善家であったわけではなく、むしろその胸中には「アメリカは日本を正しく見ず、また見ようともしない」との不満がくすぶっていた。したがってアメリカ新聞記者団を迎えた蘇峰はかねてからの憤りを垣間見せつつ次のように要望している。

日本が世界平和に異図を抱き、他国への領土的野心を逞しくし、隣国に不穩の計企を蓄えていると疑う者は日本に來り見よ。日本の真相を知ろうとする者には、我ら日本人は一切を開放し、遠慮なく調査することを望むのであって、そのためにはいかなる便宜も与え、いたずらに隱蔽するようなことはない。その意味で今回、日本新聞協会が主催となり、

わが同業者諸君を米国から招待するのは甚だ時宜に適しており喜ぶものである。第三者の離間中傷に乗って米国新聞記者が色眼鏡をもって日本の痛くもない腹を探るようなことがあれば、我等にとつて迷惑千万であるだけでなく、米国のためにも笑止千万である。誤解には両損あつて一得なく、真解には両得あつて一損なしだ。

我らは強いて米国新聞記者諸君が我らの意見に賛同することを必要としない。賛同すればまことに仕合せだが、賛同しないまでも、真相を究めた上でのそれならば、諸君が自国のためにすることに向かつて苦情を持ち込む理由はもたない。ただ枯尾花を幽霊視するような誤解の上の反目に至つては、諦めることはできない。⁽⁵⁰⁾

アメリカ人は日本が中華民国の征服を狙つて侵略を進めていると見るが、それは誤解であり、そうしたことは日本を实地に見聞してから判断を下すべきだというわけである。アメリカ人の対日観に対する不信感、蘇峰の心に深く根を下ろしており、別の個所で彼は以下のようにも述べている。すなわち、アメリカ人は日本人に優越感を抱いている、それがあつた場合には差別待遇となつて表れ、また別の場合には逆に動いて日本恐怖症となる、そうした彼らの態度が「遺憾であり、不快なのだ」というのである。⁽⁵¹⁾

右のように蘇峰は日米親交を望みながらも、それを傷つける主因はアメリカ人の対日姿勢にあると考へた。その一方で、かつて日本を同情と理解をもつて眺めてくれたアメリカ人がいたことを思うと、彼は懐かしさを禁じ得なかつた。その一人は長老派教会の宣教師アーネスト・A・ストージ (Ernest Adolphus Sturge) である。ストージはカリフォルニア州の日本移民に布教を行った親日家で、本務のかたわら明治三十六年 (一九〇三) にアメリカで英文詩集『日本の精神』 (*The Spirit of Japan*) を刊行している。これは天皇誕生日の喜び、楠木正成の忠義、富士山の美しさなど、日本の心情と自然をあたかも日本人の目を通して歌つた作品集であり、二年後の明治三十八年、その第二版が日本でも出版されると蘇峰はそれを絶賛している。⁽⁵²⁾ それから時を経て

昭和九年、同書の増補第三版が発行されたが、その直前にストーヂは亡くなり、これを惜しんだ蘇峰は次のように述べている。ストーヂ博士は第三版を見ずして昇天し去ったが、同書を見ると、博士の日本人と自然に対する同情、認識がいかに豊かなものであったかを感じずにはいられない。博士は半世紀にわたって日本人に隣人愛を發揮した「良友」であり、明治天皇から勲章を授与され、帝国教育会から特別会員に推薦されたのも当然であった。⁵³このようにストーヂを追想した蘇峰は、その他にもメソヂスト教会の監督として日本、韓国での布教に従事したメリマン・C・ハリス (Merriman Colbert Harris) やシカゴ大学の人類学者で知家のフレデリック・スタール (Frederick Starr) といった亡き人々を「日本を愛する米人」「日本の理解者」としてとり上げ、そうしたアメリカ人を思うと自分の心は平らかにになると懐かしんでいる。⁵⁴

以上のように蘇峰はアメリカ人に日本理解を求め、過去の親日的アメリカ人の言動に思いを巡らせたが、他方、彼自身が他者に要求するのみでアメリカ理解の努力を怠っていたというわけではなかった。この時期の蘇峰がアメリカの知識を得ようと努めていたことは、『アメリカとは何か?』(What is America?)、『アメリカの理想』(The American Ideal) といった書物に目を通してのことからも明らかである。⁵⁵前書は中西部で育ったアメリカ人自身の手になるもの、後書はイギリス人コラムニストが外からアメリカを眺めたもので、以下煩瑣を避けるため便宜上、『アメリカとは何か?』をA書、『アメリカの理想』をB書と呼ぶことにする。これらの二冊に蘇峰が加えた書き込みを追うと、彼が次のようなアメリカのプラス点を読み取っていたことがわかる。第一にトマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) やエイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln) に見られるアメリカ人の理想主義であり、第二に詩人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) の作品に見られるアメリカ人の荒削りなまでの独創性である。

第一のアメリカ人の理想主義であるが、A書はジェファソン、リンカンを「アメリカに偉大のヴィジョンをも

たらしめた人物」、「小規模の資本主義、経済と政治的民主主義の結合のために戦った」「英雄」としてとり上げている（傍線は蘇峰が原本に書き込んだアンダーラインを再現したもの、以下同様⁽⁵⁶⁾）。加えて A 書から蘇峰は、アメリカの小学生が学校でそうした偉人たちの理念、民主主義、自由、平等、公正、人道、愛国心、祖国防衛の義務を教えられることを確認した。また B 書も「ワシントン」[George Washington] がアメリカ革命の心臓と手であるとしたり、ジェファソンはその精神であった」とし、ジェファソンは「独立宣言」起草によってアメリカに「社会的自由の理想」を残し、さらに人類の歴史に決定的な画期をもたらしたと指摘する⁽⁵⁸⁾。一方、風変わりなまでに正直で「人間的同情」心の厚いリンカンは、南部を旅行した際、鎖につながれて移動する黒人奴隷の団を目撃し、「それを忘れなかった」、そのときから彼は奴隷解放の意見を形成し、その志に筋金が入ったことを説明する⁽⁵⁹⁾。蘇峰はこういったジェファソン、リンカンの記述に興味を示し、さらに「独立宣言」の要所を引用した箇所にもアンダーラインを引いている。少年期、青年期に彼はアメリカの独立戦争、南北戦争の歴史をよく学んでいたが、その知識を改めて記憶に刻んだわけである。

第二にホイットマンに見るアメリカ人の獨創性である。蘇峰は大正二年にホイットマンの詩集『自転する地球』(The Rolling Earth) に目を通していたが、昭和十二年初頭に B 書を読んだ際、再びホイットマンに出会った。B 書はホイットマンを「全くの本能からの詩人で、観察力が鋭く、過敏なまでの感覚をもち、情熱的で激しい人物だった」とし、その詩集『草の葉』(Leaves of Grass) の詩句は「荒削り、獨創的で力の込められたもの」であったとする⁽⁶²⁾。ここで『草の葉』に収められたいくつかの詩の部分引用されるが、とくにホイットマンらしい個性的な印象を蘇峰に与えたものの一つは「ぼく自身の歌」(“Song of Myself”) の一節であったと考えられ、以下のような個所に蘇峰はサイドラインを引いて着目している。

ウォルト・ホイットマン、一つの宇宙、マンハッタンの息子、
 手のつけられぬ乱暴者、肉づきがよく、好色で、食い、飲み、そして産み殖やす、
 めそめそするなど性に合わず、男や女を見くんだり、そっぽを向いて冷たくするのも流儀ではなく、
 慎みは申しぶんないが、劣らず不作法このうえもない。⁽⁶³⁾

ほくが矛盾しているのかい、

それならおおいに結構、ほくはたっぷり矛盾してやる、

(だってほくは大きくて、中身がどっさり詰まっているんだ)⁽⁶⁴⁾

こうした詩句をあげながらB書は、ヘンリー・W・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) やウィリアム・C・ブライアント (William Cullen Bryant) の詩はロンドンやローマでも書ける類のものだが、ホイットマンの見方は「完全にアメリカ的」で、この「荒削りの教育を受けていない天才」はそのときどきの精神の要求にしたがって、矛盾や一貫性にこだわることなく言葉を吐き出した点を説明する。⁽⁶⁵⁾ さらにホイットマンはその人を驚かせるような文体、趣味を通じて「人間の知覚の境界を拡大した偉大な精神的冒険家」であり、自身の心の内面を見つめ、自己の精神に無限の機会を発見することによって「人間の魂のフロンティアを拡げたのである」⁽⁶⁶⁾ という。加えてB書は、ホイットマンのような態度、生き方を敷衍し、そこから導き出されるものとして次のように記している。⁽⁶⁷⁾

アメリカ人の愛国心の核心は、誰もが自分自身に忠実でなければならぬということだ。アメリカは偉大であった。なぜなら諸国間の中でただ一国、アメリカは人間の偉大さを認めたからである。アメリカは彼を束縛したり、一つのし

きたりの型にはめたり、あるいは同胞に従わせようとはしなかった。アメリカが彼に求めたのは、彼が自分の人生をフルに生きることであり、それを可能な限り最上のものにするということだった。そこからアメリカ自体の強さが生まれただのだ。

アメリカは人間の内面に偉大性を認める国であり、それだからこそ、そこに住むアメリカ人に自由を認め、自己に忠実な生き方をさせることによって最上の自分を發揮するよう求める、そこにアメリカの強みがあるのだというのである。これはラルフ・W・エマソン (Ralph Waldo Emerson) の「自己信頼」に通じるスピリットであり、ホイットマンのような独創的詩人はそうした土壌から生まれたといえるが、このようなアメリカの長所に蘇峰は興味を示していたのである。しかしながらその一方で蘇峰はA書、B書からアメリカのマイナス点も読み取っていた。それは、第一にアメリカ社会に成金的、拝金的風潮があること、第二にかつての奴隷制に見られるような人種差別があることの二点である。

第一のアメリカ社会の金銭万能的風潮であるが、A書はアメリカ人の恥部として、実業家コーネリアス・ヴァンダービルト (Cornelius Vanderbilt) を「欲深い老人」、ジェイ・ゴールド (Jason "Jay" Gould)、ジョン・D・ロックフェラー (John Davison Rockefeller) を「国家的悪魔」と呼び、十九世紀、これらの人々が不平等と収奪、巨大資本の投資、銀行の独占、金融統制の集中化によって金持ちになろうとし、その結果、「泥棒男爵」〔新興成金の悪徳資本家〕の時代はクライマックスを迎えることになったと糾弾する。そうした世界の前でアメリカの「ヴィジョンを汚した」ジェイ・ゴールドやロックフェラーと、アメリカに「偉大なヴィジョンをもたらした」ジェファソンやリンカンとは、両立する余地がないとA書はいう。⁽⁶⁸⁾ここで見るアメリカの資本家への非難と理想家への高い評価という対置は、蘇峰が従来からもつ見方と一致するものであり、彼はそうした個所にラインを引い

て納得している。

第二にアメリカ人の人種差別である。すでにリンカンが奴隷解放の志に筋金を入れたという個所があったように、B書はアメリカの奴隷制に言及していたが、さらにその以前についても次のように指摘している。すなわちタバコの大規模栽培のために送られてきたアフリカ人を使用することで「ヴァージニアの白人入植者は労働する必要がなくなるほど豊かに」なったが、ジェファソンはこの自国の制度上最大の欠点「奴隷制」に盲目的ではなかった。「彼の黒人奴隷廃止の訴えは同時代の奴隷所有者を引きつけることはなかった」が、一八〇七年、将来の黒人奴隷の輸入を禁止した法律が可決されることになったとB書は説明する。⁽⁶⁹⁾ こうした個所へ頻繁にラインを引いたことからうかがえるように、蘇峰はアメリカの人種問題に敏感であった。同じ時期、彼は「北米合衆国の中に在つても、ニグロと白人との間の差別はひどいものであります」とし、ベルリン・オリンピックの男子短距離、走幅跳で四つの金メダルを獲得したジェシー・オーエンス (James Cleveland "Jesse" Owens) に言及して、オリンピックでアメリカ人はそうした黒人をアメリカ人であるとして威張っているが、国に帰れば「さういふ人間は人間扱ひをしない」のだと批判している。⁽⁷⁰⁾

以上のように蘇峰は米英で出版された書物を通じてアメリカを知ろうと試み、同国の優れた部分とそうでない部分とを再確認した。なぜ「再確認」というと、これらの書物を読む前から彼は、アメリカの良き面について例えば次のように語っているからである。⁽⁷¹⁾

……〔自分の恩師・新島襄先生が渡米した直後の〕米国は、米国の歴史の中に於て、最も立派な歴史の米国である。……リンカンが、奴隷解放を宣言して、人類の自由と云ふことを主張し、その決心をもつて働いたと云ふことは、米国の歴史の上に於て、最も光榮ある歴史である。……然も先生の行かれた所は、所謂ニューイングランドで、ピユウ

リタンの血の流れて居る所である。

……自由の精神、自治の精神、独立、清潔、潔白の精神、さう云ふ精神の漲つてゐる米国である。

このようにリンカンとアメリカの理念を称える蘇峰は、同国を鏡としてその良き点を見習うべきであると考え、以下のようなコメントも残している。すなわち、米国ではワシントン、リンカン、エマソンについて多くの本が出ている。日本人は精神的、西洋人は物質的であるというのが、西洋人は自国の偉人を百年、二百年、三百年経つても観察、追想し、そこにあらゆる心を傾けている。ところが自から精神的であると誇る日本では、少なからぬ偉人がいるのに、それを投げやりに行っているのは甚だ遺憾だといふのである。⁽⁷²⁾しかし蘇峰が仰ぎ見るアメリカの偉人、美点とはあくまで過去のものであった。「南北戦争」当時の米国は今日の米国ではない」と彼はいう。新島留学当時の米国では、リンカンの流した血はなお温かく、ニューイングランドには「清教徒の流風餘韻」がなお漂い、みなぎっていたが、この「善き米国」は今日、その面目を頗る変えてしまった。⁽⁷³⁾すなわちかつての高潔な精神や理想を失い、利己的、物質的、拜金的な傾向の目立つ自己中心的で濁った国に墮落してしまつたといふのである。日本はその米国から「物質万能の悪思想」を輸入するようになって当惑千万であると蘇峰は顔をしかめる。⁽⁷⁴⁾彼は凜とした精神をもつ古き良きアメリカを確認しつつも、現実のアメリカに対しては失望の気持を隠すことができなかったのである。このように蘇峰はもとから「良きアメリカ」、「悪しきアメリカ」のイメージもち、A書、B書を通してそのパターンに合ったものだけを受け入れたにすぎなかった。そのためアメリカについて知ろうという意志はあつたものの、これまで気づかなかつた同国の新たな面を発見したことは少なかつたであらうと考えられる。

以上、本章では日中戦争前の蘇峰の日米親交論とそれをめぐる彼の言動について明らかにした。ここで見られ

るように蘇峰は日米親善を支持し、日米戦争は両国にとって「両損ありて一得なし」であると反対した。アメリカとの戦いに限らず、大規模な戦争は彼にとり好ましいものではなかった。平和を保つ上で、蘇峰はアメリカが日本を正確に理解することを求め、また自らも同国に関する文献にあたり知識を得ようとした。読書を通じて彼は「凜とした精神をもつ過去のアメリカ」と「物質的、拜金的な墮落した現在のアメリカ」を見たが、それはこれまで培い、心の中に焼き付けてきたイメージと変わるところがなかった。日米親交論を唱えつつも、蘇峰から見たアメリカは外に対しては優越感をもって日本を誤解し、内においては腐敗しつつあるというネガティブな面が強い国として映じたのである。

二 日米親交の条件（I）——日本の特殊位地の承認

前章で見たように蘇峰は日米の親善と平和を望んでいた。それではどのようにすればこれを達成することができるか。彼はその必要条件としてアメリカが、第一に日本の「特殊位地」を承認すること、第二に日本人を人種ならびに海軍軍備の両面において対等に扱うことを要求している。本章では第一の面を検証してみたい。

まず蘇峰の主張は次のようなものであった。米国は東洋における日本の「特殊位地」を認識することだ。米国は自分のモンロー主義を世界の公道とする反面、日本の東亜自治主義を悪魔の邪法として差別しており、日本がシナの門戸を閉鎖し市場を壟断して我物にする野心があるなどと「飛んでも無き錯覚」に陥っている。日本は南北米大陸における米国の特殊位地を認めているのだから、逆に米国が東洋における日本の特殊の位地を認めるのは当然である。「日本は何等領土的野心を持たない」が、東洋の一帝国として地理、歴史、経済、国防上、そこに特殊の位地を占めるべきは当然であり、かつてのシオドア・ルーズヴェルト（Theodore Roosevelt）大統領や

ジョン・ヘイ (John Hay) 國務長官はおおむねそれを認めていた。もし海軍軍備の平等に加えて、この特殊地位を米国が受け入れるならば、日米間の平和は太平洋の名のごとく長く久しく太平となるだろう。我らはこれ以外に方法があるのを知らないと彼は述べている。⁽⁷⁵⁾

蘇峰は、日本がアメリカのモンロー主義を認めているように、アメリカも日本の東亜自治主義、「特殊地位」を認めよ、日米平和を確実にするためにはそれしかないという。それでは日本の特殊地位とは何か。当時の読者には周知のことで説明の必要がないと判断したためであろう、蘇峰はこれを明確に定義していないが、右の主張からも明らかのようにそれは東亜自治主義 (アジア・モンロー主義) とほぼ同じような意味を指し、それ以外の文章と照らし合わせてみても、第一次大戦期に彼が主張したアジア・モンロー主義論、およびその一環としての日支同盟論の中身と基本的には同じであったと考えられる。ここで蘇峰の主旨に沿って日本の「特殊地位」をまとめてみると次のようになる。⁽⁷⁶⁾

- ① 日本はアジア・モンロー主義の盟主である。……世界を見ると、米国はモンロー主義により欧州による南北アメリカ大陸への干渉を排除し、他方、欧州は欧州で自分たちのことは自分たちで処理しているが、アジアは欧米の植民地となって自治を奪われている。その中で差し当たって白人と唯一交渉できる日本がアジアの盟主としての責任を担い、米国のモンロー主義と同様に、アジアのことはアジアが処理するというアジア・モンロー主義を実践し、黄白両人種の平等を達成する。

- ② 日本はシナに対してある面での経済上の優先権、特殊権益をもつ国である。……東アジア世界を見ると、日本とシナは地理、経済的に密接不可分の関係にある。日本は人口の増加と資源の不足に悩み、このまま

では逼塞するしかないが、隣国のシナは無限の資源（鉄、石炭、綿花など）を埋蔵し、日本の生存上、不可欠な原料の供給地、商品の販路となる。そのため米国のような富裕な国と異なり、日本にはシナに対して特別の経済的優先権、権益が認められるべきである。ただし日本はシナの門戸を閉鎖し、その市場を独占するわけではない。

③ 日本は東アジアの安定力、警察官である。……日本とシナは軍事、国防から見ても密接不可分の関係にある。これまで西洋列強のシナ分割が十分に進まず、ロシアの南進が抑えられたのは、東アジアに日本という強国の存在があったからである。日本は今後も、西洋の侵食からシナを防衛する楯となり、その秩序と安定を維持する義務をもつ。

右のように蘇峰は日本を、①東アジアにおける自治運動のリーダー、②中国大陸における経済的優先権、特殊権益の保持者、③同大陸の動揺と混乱を抑制する秩序力とみなした。アジアの先駆けとして日本はその自治と安定をはかる義務をもつとともに、同地域から生存に必要なものを優先的に引き出すことを許されている、それが日本の「特殊地位」であり、アメリカはこれを承認すべきだというのが彼の主旨であった。蘇峰のこうしたアジア・モンロー主義発言は時期からいって、やはりアジア・モンロー主義的な思考からなされた天羽声明（昭和九年四月）を外から支持、補強する形にならざるを得ない。天羽声明が直ちにアメリカから反発を受けたように、蘇峰の見解、とくに②はアメリカ政府の原則とする中国の門戸開放、機会均等主義と対立せざるを得ない。しかし彼の目から見れば、アメリカは自らモンロー主義を行っているのに、他国にアジア・モンロー主義を認めないのはアンフェアではないか、また日本は自国の死活がかかっているため中国大陸への経済的優先権を有するので

あつて、天然資源に恵まれ、広大な植民地をもつなど余裕のある欧米諸国は日本の優先権を認め、それを妨害しない形で中国市場に参入するべきである、つまりアメリカは中国の全面的門戸開放政策でなく、限定的、部分的門戸開放政策をとるべきだということになる。⁽⁷⁸⁾ しかしながら当時ローズヴェルト大統領は、日本がアジアの広大な市場と原料から西洋を排除するであろうと疑惑の目で見ており、またアメリカ海軍将官会議も日本は「極東問題における絶対権力」、領土拡大と極東の商業的、政治的支配を求めていると警告している。⁽⁷⁹⁾ そのような見方を想定して蘇峰は、日本は「支那の領土其物に就て、何等の野心も欲望も無い」、これだけは明言しておくを念を押しているが、ここで蘇峰のアジア・モンロー主義（日本は中国に例外的なアクセス権をもつ）とアメリカ政府の門戸開放、機会均等主義（すべての国が中国に均等のアクセス権をもつ）の対立は明らかであり、以後も両者は平行線をたどるしかなかった。

右のように蘇峰はいわば日本例外論を訴えたが、アメリカ政府がそのような考え方を容れることはなく、むしろ日本例外論を日本侵略論ととらえて警戒した。日米両国は結局、中国市場をめぐる自国により有利な立場をいかに確保するかという点を争っていたわけだが、蘇峰はこの時期、それまで以上に日本の特殊地位を強くアピールするようになっていた。その背景には国際経済の保護主義的傾向があった。周知のように昭和四年に始まる世界恐慌に直面した主要国は保護主義に傾き、自給自足のためのブロック経済を形成してそれぞれのブロック内での貿易、投資の独占を図るようになる。ラテン・アメリカへの影響力を確立していたアメリカは昭和五年、スムート・ホーリー法（The Smoot-Hawley Tariff Act）によりドル・ブロックを強化し、世界中に自治領と植民地をもつイギリスは自由貿易を放棄して昭和七年、オタワ協定によりスターリング・ブロックを強化した。とくにアメリカについて見るならば、同国ではもともと南北戦争以来、保護主義、高関税政策が支配的であったが、昭和五年成立のスムート・ホーリー法は、①広範囲にわたる高関税で、②歴史的に見て課税品目の平均関税率が

高く、③当時の諸外国と比較しても高関税であるという基本的特徴をもち、これが諸外国の関税引き上げを誘発し、世界経済のブロック化現象を拡大させることにつながった。⁽⁸⁰⁾ 以上のような状況の下、国際金融秩序の回復と経済的な国際協調を目指すロンドン国際経済会議（昭和八年六月七月）が開催されたが、金本位を離脱していたアメリカと、フランスを始めとするヨーロッパ金本位国との主張が対立し、会議は失敗に終わった結果、ブロック形成の動きは一層高まることになった。

このロンドン国際経済会議が休会した後、蘇峰は、かつて日本に開国を教えた米国が日本に鎖国を行い、日本に自由貿易を示した英国が日貨排斥を行っていると皮肉を交えて批判している。アメリカ（およびイギリス）は移民法と関税法によって日本からの移民と商品をシャットアウトしようとしているというのである。続けて彼は、日本は好んで孤立するのは上策ではないが、こうした国々（米英）に追随してきた外交の旧習を脱しなければならぬという。「天は自から助くる国民を助く」のであって、他国の尻馬に乗るのでなく「国民的自助」と「国家的自主」によって驀進する以外に日本の道はないとの思いを蘇峰は一層固めており、そうした中で日本の「特殊地位」を声高く主張したのである。⁽⁸¹⁾ ただしアメリカはスムート・ホーリー法が大恐慌と相まって同国の貿易額を激減させたことに対する反省から、昭和九年六月に一九三四年互惠通商協定法（The Reciprocal Trade Agreements Act）を成立させ、以後、低関税化と自由貿易の方向へと転換していくが、⁽⁸²⁾ 管見の及ぶ限りでは、蘇峰がそうしたアメリカの軌道修正をフォロワーした形跡は見られない。

さらに昭和十年になると、日本国内では「持てる国」「持たざる国」の言葉が流行するが、蘇峰も「満腹国」「空腹国」の言葉を用いてアメリカを批判するようになる。彼によると、世界には人口に比して広大な面積と植民地をもち、天然資源が豊富な満腹国（米、英、仏、ベルギー、オランダ、ソ連）とそれをもたない空腹国（独、伊、日）があるという。日本は「決して他国を侵掠せんとする野心の持合はない」が、年々増殖する七、八十万

ないし百万の人口をどうするか考慮しなければならず、その際「日本人入るべからず」の高札を立てられ、その出口を塞がれては、毎年百万人の干物を製造するしかない。「世界は決して満腹国だけの世界ではない。」すべての人間のために世界の局面は訂正される必要がある、それをいかにして正すかは、満腹国と空腹国が虚心坦懐に協商して宜しきを得なければならぬ。しかるに「若し満腹国が、強慾非道に、世界を我物顔に壟断せんとするに於ては、其の不平は、何れの方面に向つてか、爆発するや必然である」と蘇峰は⁽⁸³⁾いう。

また彼は国際連盟にも言及して次のように語っている。連盟の結果を見れば、これは腹一杯に食った連中が、その現状を維持するためにこしらえた機関のように見える。今日の世界は満腹国と不満腹国に分かれており、一方はもう食つてしまつて、消化剤でも飲まなければ吐きたくなるほど食つており、周囲にはまだ腐るほどのものを並べている。それでも人に分けてやらない。一方はのどから手が出るほど腹が空いて、土塊でも食いたたいほどになっているから、そういうご馳走があれば、生理的必然の要求で手が出したくなる。ところがここは入るべからずと困っているわけで、連盟というものは露骨にいえば、食傷するほど食つた者が自分の持ち物を飢え死にするほどの者に分けてやらないための機関になっている。⁽⁸⁴⁾このように蘇峰はアメリカ、イギリスに加えて、国際連盟についても批判を行った。

以上の満腹国、空腹国の対立構図について蘇峰は、国内言論界の風潮だけでなく、アメリカ人の著作からも示唆を得ていた。その一つに『平和の代価』(The Price of Peace)と題する一書⁽⁸⁵⁾があった。同書は「幸運な国々 the fortunate countries」としてイギリス、アメリカ、フランス、ソ連、「より幸運でなく国々 the less fortunate nations」としてドイツ、イタリア、日本をあげ、両者間の資源の不平等が後者(日独伊)にいかにか大きな損害を与えているかとし、この不平等を解消する平和的手段が発見されない限り、世界は新しい戦争に突入する可能性⁽⁸⁶⁾があるとする。さらに同書は以下に見るように日本の置かれた状況に理解を示していた。それによると、資源

不足で狭い国土に増大中の人口を抱える日本は英米から移民の門戸を閉ざされ、また満洲、韓国への植民は気候や生活水準に難があることを知り、国内産業を拡大し続けることによって危機を先延ばししてきたが、インド、中国からの輸出競争、西洋諸国の関税障壁と経済的ナショナリズムという障害に直面している。そうした中で満洲国は日本に食糧と原料、開発のための場を約束するもので、その支配は日本人にとって生きるか死ぬかの問題となっている。しかし日本の最高問題は人口であって、既存の状態ではその増加を長く支えることができず、日本人は「爆発か膨脹か」というベニート・ムッソリーニ (Benito Amilcare Andrea Mussolini) のいうような二者択一に直面しているが、原料の供給源、余剰人口のはけ口として領有、開発するための新たな場所はなく、地球上のすべての土地は幸運な大国、英米仏ソの主権下に直接置かれるか、南米がモンロー主義で守られているように間接的に保護された状態にある。欧州におけるドイツのヴェルサイユ体制への反抗とアジアにおける日本のワシントン体制への反抗はよく似ており、このままではドイツ、イタリアは戦争によって既存国際法に守られた現状に変化を起こす以外に手段がなく、日本の帝国主義も独伊と同様の侵略的な国家政策を示すことになるだろう。日本のプライドを傷つけた愚かな移民法以来、日本とアメリカの関係は危険なままであり、両国の政策が変わらない限り、日米衝突の可能性は減じるどころか、むしろ増える運命にあるように思われる。アメリカと日本の戦争は必然的に長期戦となるが、アメリカの利益は戦いの代償に値するほど道徳的かつ実質的なものなのだろうか？ 現在答えを出すべき問題はそれだと『平和の代価』は述べている。⁽⁸⁷⁾

右のように日本の立場に理解を示し、日米戦争の危険に警鐘を鳴らす『平和の代価』の論旨は、蘇峰の考えと共通するところが多い。日本は人口増大と資源不足に苦しんでいるが、その解決の道を英米仏ソによってプロックされているとする同書を、蘇峰は我が意を得たりの感をもって読み進めたことであろう。読了後、彼は次のように述べている。『平和の代価』の結論は、今日の世界不安が経済的不平等にあり、この不平等に対して組織的

平和は存立することは不可能であるというものだ。ここでは世界列強を二分して、一方を満足国、他方を不満足国〔原書では幸運な国とより幸運でない国〕とし、満足国が不満足国に必須の原料、人口の出口を譲歩しなければ、ドイツ、イタリア、日本の三国は非常手段に訴えざるを得なくなり、戦争を止めることは不可能であるとしている。この議論は欧州だけでなくアメリカにも適用できるのであり、「世界に於ける経済的不平等の骨頂は、北米合衆国だ。」面積が广大で潤沢な天然資源を専有しつつ、自ら鎖して他を容れないばかりか、他の領域にさえも足を踏み出そうとしている米国は、不平等の上に不平等を重ねるものではないかと彼は非難する⁽⁸⁸⁾。このように『平和の代価』は蘇峰の主張を外から裏づけ、強化する形となった⁽⁸⁹⁾。

その他にも彼をうなずかせざる意見を読むアメリカ人がいた。日米親善を目指して精力的な活動を行ってきた宣教師シドニー・L・ギューリック (Sidney Lewis Gulick) である。昭和十年、ギューリックは『日本理解に向けて』(Toward Understanding Japan) を出版したが、その目的は同書のサブタイトルに示されたように日米「戦争の脅威を取り除くための建設的な提案」を行うこと⁽⁹⁰⁾にあった。この趣旨に沿ってギューリックが行ったのは、日本人の立場に立って世界を眺めてみるということである⁽⁹¹⁾。ギューリックもソ連、中華民国、アメリカといった隣国に比して日本の土地が狭く、資源が乏しいことを指摘し⁽⁹²⁾、「日本は極東における平和、生存のための適当な場所を求めている」、西洋も東洋における平和を望んでいるのだから、日本の問題に率直に対面してその助けとなる処遇を与えるべきだという。蘇峰はそうした記述に賛同の意を込めてサイドラインを引いている。またギューリックは、リットン調査団のアメリカ人委員顧問ジョージ・H・ブレイクスリー (George Hubbard Blakeslee) 教授が「極東の問題を解決する最良の手段」として次のように述べたとして、そのコメントを左記のように引用している (傍線は蘇峰が書き込んだアンダーラインを再現したもの、以下同様)。

〔ブレイクスリー教授は次のように述べた。〕日本と中国に関し、リットン報告を通じて支配的な思想は、おのおのが他者に対して貴重な援助を与えるべきだというものである。日本はとくに外国貿易に依存している。もし中国、アメリカ合衆国、イギリス帝国とソビエト連邦が厳しい経済ナショナリズムの政策を実行すれば、関係諸国すべてにとって不幸であるのは疑いない。しかしそれは日本に取って破滅的であり、極東の平和にとつて直接の危険となる。東アジアにおける解決策は協力の道に沿うことであり、そしてこのルートに従うことで最も得るものが大きい国は日本である。⁽⁹⁴⁾

これによると、米英中ソが保護主義を行えば日本の産業は壊滅的打撃を受け、(追いつめられた日本によって)東アジアの平和が危機に瀕するから、そのようなことをせず、各国は相互に協力すべきだというのである。「腹国」の経済ブロックを憤っていた蘇峰は、この個所に同感の意を込めてアンダーラインを引いた。また各国協力の道に沿うことで最も多くを得るのは日本であるという部分にもラインを引いていることからうかがえるように、彼は日本が暴発でなく協調によって生き残ることができればそれに越したことはないと考えていた。さらにギューリックは、日本を批判するアメリカ側にも反省すべき点があるとして、以下のように記している。

アメリカ人は日本の満洲における最近のやり方と政策、帝国主義的な軍国主義者が公式上になされた平和誓約を甚だしく無視したことによって、日本を苛酷に裁きがちである。しかしヨーロッパ列強が極東と関係したこの百年間の恥ずべき歴史をよく考えるべきである。それは貪欲な侵略、密やかな陰謀、残忍な戦争、非道かつ理不尽な破壊であったわけではない。条約は侵害され、相手に敬意を払うという神聖な義務はくり返し無視されたのである。……

アメリカ人はさらに次のことを悟る必要がある。アメリカ合衆国ですら他国の扱いについて批判を完全に免れないということだ。われわれがインディアン部族の多くに行つた不名誉の取り扱いは、すべての良識ある市民にとつて深い悲しみの原因となっている。メキシコとのわが戦争の正直な歴史は、グラント將軍が「かつて強国民が弱国民に行つた中

で最も不正なものの一つ」であると特徴づけているが、われわれのスペインとの戦争の諸局面、中央アメリカの小国との関係は、愛国者が嘆くことの多い記録を示している。⁽⁹⁵⁾

アメリカ人は日本の満洲での行動を厳しく裁断するが、ヨーロッパ人と自分たちは何をしてきたのか、インディアンへの迫害、対メキシコ戦争、中米への介入を振り返るべきだというのである。これはアメリカに対して「他国を糾弾する前に自国を反省せよ、己れの欲せざる所を人に施すなかれ」と唱え続けてきた蘇峰を大きくうなずかせるものであり、彼はアンダーラインとサイドラインの双方を該当個所に引いた上、「此点要注意」と書き込み、さらに細長い紙の付箋を目印に挿んでいる。このように日本人の立場に立って理解を試み、しかもアメリカ人の自省を促すギューリックの態度に蘇峰はよほど感銘を受けたのであろう。同書の中表紙に「昭和十大ノ著作也」の文字を筆圧を込めて力強く記している。⁽⁹⁶⁾ この本は昭和期に入ってから出版された中でも十指に数えられるほどの重要書だというわけである。しかしアメリカではギューリックは次のような批評を受けた。すなわち「ヨーロッパ人がアジアで犯した過去の不正が、日本の現在の行動を正当化するようなことはほとんどない」、この本はこれまで読んだものの中で「日本の侵略的政策を最高に擁護したもの」であるといった批判であり、以後、ギューリックはそうした印象を抱かれ続けることになる。⁽⁹⁷⁾

アメリカ人の中に日本の理解者を見出した蘇峰であったが、アメリカ政府が彼のような日本の特殊地位を認めることはなく、蘇峰はアメリカへの反発を抱き続けた。それと並行して彼の内から湧き出て来たのはドイツへの共感である。昭和十年三月、ドイツがヴェルサイユ条約の軍備制限条項を廃棄し、義務兵役制による再軍備を宣言すると、蘇峰はこれを近頃「尤も痛快の一事」だとした。ヴェルサイユ条約という「勝者の権」に束縛されてきたドイツ人の立場になって考えれば、今回の自由行動の獲得には快哉を叫ぶ他ないだろうというのである。⁽⁹⁸⁾

さらにソ連とその共産主義の東アジアへの膨脹拡大を恐れていた蘇峰は、昭和十一年十一月、日独防共協定が締結されるとこれに賛同した。彼によると、世界の赤化運動に最も当惑しているのは西にドイツ、東に日本であり、両国がその防禦に提携するのは当然である。西でナチス政府が赤化を拒絶しているのは我が意を強くする所だが、東ではシナの周囲が赤色に塗りつぶされ、シナ内部も侵食されつつあり、さらに日本にもその毒刃が及ぼうとしており、そうした中で日独防共協定はやむべからざるものであるという。⁽⁹⁹⁾

このように蘇峰はドイツとの提携を必然視した。ただしドイツと組むことよってアメリカ、イギリスに対抗しようというわけではないとして、次のように念を押している。すなわち、我等の相手は世界を革命に導こうとする赤化運動であつて、その他ではない。英米仏が共産国でない限り、わが国と隔意のあるはずはなく、自分は赤化に対してドイツはもとより何人とも提携を否むものではないというのである。⁽¹⁰⁰⁾ また三国干渉以来、ドイツに不信感を抱いてきた蘇峰は、ナチスドイツに対してもナイーヴであつたわけではなかつた。ドイツ人の弱点は他国に暗いことで、自分は同国の措置をすべて是認するわけではない、ナチスについては「不服の点」が多く、アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) 総統のやり方には感服できない点も少なくないとしている。⁽¹⁰¹⁾ 例えば昭和十一年三月にドイツがロカルノ条約を廃棄してラインラントに進駐したことは、本来軍隊を置いてはいけない地域にそれを差し向けた約束違反の一つであるとし、同じく昭和十一年七月より始まつたスペイン内戦については、ソ連の支援する人民戦線政府とヒトラー、ムッソリーニの押す反乱軍のどちらが勝つても「確なことは無い」、排外独善主義のファシズム、国家の基礎と秩序を破壊するコミユニズムはどちらも日本の一君万民、皇室中心主義に反し、日本から見れば「危険状態」「他所の病氣」だといふのである。⁽¹⁰²⁾ また蘇峰はヒトラーのような一朝風雲に乗じて地位を得た人物が国政をとるドイツには安定がないとし、⁽¹⁰³⁾ ヒトラーが日本人に偏見を抱いていることも認識しており、講演の中でヒトラーの『わが闘争』 (Mein Kampf) の一節を批判したといふ。⁽¹⁰⁴⁾ さらにイタリアに

つては、昭和十一年五月の同盟によるエチオピア併合を「暴力団」のやり方とみなし、国家が暴力団になるとその取締りは始末におえないと嘆じている。⁽¹⁰⁵⁾このように独伊を眺める蘇峰は、両国の独裁政治は日本の国体に合わないとし、日本人がそれに「随喜」して余りに「独逸かぶれ」しないよう戒めた。⁽¹⁰⁶⁾

右のように蘇峰は、共産主義への防波堤を築くという点で日独防共協定の締結に賛成したが、ドイツに対して一定の距離を置いていた。しかしアメリカに強い反発心を抱く彼は、防共協定をめぐってやはり同盟を意識していた。すなわち協定締結によって日本政府がアメリカ、イギリスの後を追うのではなく主体的な外交を實踐したという喜びを感じ、そこに留飲を下げたのである。蘇峰によれば、従来の日本外交は「パリ講和会議、ワシントン会議、第一次ロンドン海軍会議などで」「英米の腰巾着」を演じるに過ぎないものであったが、満洲事変以来、そうした「追随外交」は一変され、今回「自主的外交」の一端として防共協定の成立に至った。それは「頗る痛快の至り」であり、日本外交もこれようやく一人前になるのではないかと⁽¹⁰⁷⁾いう。日本はようやく米英の束縛から脱して自由に国家意志を發動することができた、それはまことに喜ばしいというわけである。アメリカおよびイギリスに対して彼がいかに鬱屈した思い、コンプレックスを募らせていたかがうかがえよう。以上のように蘇峰は、ヒトラーとナチスドイツに批判的な意見をもちながらも、アメリカ、イギリスを中心とする世界秩序に反旗を翻したドイツに共鳴し、ドイツと防共協定を結ぶことによってアメリカ追随を脱したとの小カタルシスを味わった。反米感情の反動で親独に向かい始めた彼は、やがて日独伊三国同盟を積極的に提唱するようになる。

以上、本章では蘇峰による日米親交のための第一条件、すなわちアメリカは日本の特殊位地を認めるべきだという主張を考察した。第一次大戦期よりアジア・モンロー主義を唱える彼は、アメリカのスムート・ホーリー法、イギリスのオタワ協定に代表される国際経済の保護主義的傾向を背景として、それを一層強調するようになった。その後、「満腹国」アメリカと「空腹国」日本の対立をさらに鮮明に意識するようになった蘇峰は、それだから

こそ逆に日米親善を訴えたのであるが、心の奥ではアメリカへの怒りの炎がくすぶり、ギューリックのように日本を理解しようとする人物がいることは知っていたものの、アメリカへの反発は募り、それと比例した形でドイツに共感を示すようになるのである。

三 日米親交の条件（Ⅱ）——人種と海軍軍備の平等

蘇峰が日米親交の条件としてアメリカ側に主張したのは特殊地位の承認だけではない。それに加えてアメリカが人種ならびに海軍軍備の両面において日本を平等に扱わなければ日米親交は成り立たないと彼は考えていた。本章ではこの点を検討してみたい。

まず人種平等の面であるが、蘇峰は理性においては日米融和を望んだが、アメリカ人の人種偏見に思いが及ぶと怒りがこみ上げ、感情の高ぶりを抑えることが難しかった。彼は次のように洩らしている。わが国に対する米国の態度には、しばしば遺憾を覚え、時に不快を感じる場合がある。それは彼らが我に差別待遇を与える、または与えようとする「自己優越感」を暴露することだ。過去、日米間の交情を最も冷却させたのは移民法、すなわち日本人を異色人種として不平等の取扱いをしたことであるが、アメリカが日本との親和を欲するならば、まず「独立檄文」（独立宣言）の主旨を応用し、日本を平等に扱うべきだ。⁽¹⁰⁸⁾ このように蘇峰は述べるが、ここでいう独立宣言の主旨とは「すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の諸権利を付与され、その中に生命、自由および幸福の追求のふくまれる⁽¹⁰⁹⁾」ということである。アメリカ人がこの原則を日本人にも適用し、双方の平等を認めない限り、両国の融和は実現しないというのである。

大正十三年（一九二四）の排日移民法成立から十年を経て、蘇峰の怒りはなお鎮まることがなかった。アメリ

カ人は「アングロ・サクソン民族の痼疾ともいふべき優越感⁽¹⁰⁾」をもち、日本人を「劣等人視⁽¹¹⁾」するという認識は、満洲事変期と同じく彼をして「世界水平運動」の主張に向かわせることとなった。全国水平社が被差別部落に対する差別撤廃に乗り出していると同様に、日本は世界の被差別人種（黄色、黒色人種）に対する差別撤廃を実現し、人種間の平等を達成しなければならないというのである。「十九世紀は、白人が世界を我物顔に占有したる時代であつた。此の白人の専制を打破するが、二十世紀に於ける世界的水平運動の要旨だ。而して其の運命の指導者は、公平のところ、先づ第一に我が日本帝国を推さねばならぬ。」⁽¹²⁾それではリーダーたる日本は具体的に何を行うべきかというところ、「侵略的、搾取的」な西洋の帝国主義に対して「包容的、善誘的」な日本独自の皇道主義を満洲国において發揮し、その正義を見せることによつて欧米人を改心させるのだという。⁽¹³⁾抱擁、同化の日本精神を満洲国からアジアに広げていくことにより、欧米人がいかに間違つたやり方でアジア諸民族を扱ってきたかを自覚、反省させ、ひいては人種平等への道を切り開くというわけである。ここで蘇峰は「彼等〔欧米人〕を敵とする必要はない」と念押しし、武力によらない平和的な手段を行うべきことを示唆する。⁽¹⁴⁾しかしその本音は他にあつたのではないか。別の個所において蘇峰は、欧米人の「優越権」に「相当の制裁を与うる」べきだと洩らしており、⁽¹⁵⁾これこそが彼の偽りない本心であつたと考えられる。ここでいう「欧米人の優越権に相当の制裁を与える」との強い主張は、アメリカ人を教諭すといった穏やかな類のものではなく、アメリカ人に目にも物を見せることによつて復讐したいという攻撃的な願望が表れている。そうした感情をできるだけ抑圧し、日米親善やアメリカ人への教誨を唱えた蘇峰であつたが、アメリカへの怒りはいつしかマグマのように噴出する時を待っていた。それだからこそ四年余りを経た日米開戦の後、蘇峰は「何時かはひとつ、奴等〔アメリカ人、イギリス人〕を殴つてやりたいと思つてゐた」⁽¹⁶⁾のだ、との本音を一気に吐き出すのである。

次に海軍軍備の平等であるが、昭和九年六月、翌年に予定された海軍軍縮会議の予備交渉としてロンドン軍縮

予備会商が日英米によって開始された。この交渉において日本は、海軍とくに艦隊派の主張にもとづき、保有兵力量の共通最大限度を要求し、差等比率主義の撤廃と軍備平等権の確保をはかったが、現行のワシントン、ロンドン条約の存続とその一律二割減を主張するアメリカと対立し、会議は暗礁に乗り上げた。この予備会商が始まる直前、蘇峰は以下のように主張している。過去の問題で日米間の交情を冷却させたのは移民法であるが、将来の難題は米国が海軍軍備で一〇対六の比率に固執する傾向である。日本は人種的差別待遇と同様、こうした「国防的差別待遇」にも断じて満足できない。米国が日本の「国防平等権」を認めることを拒むならば日米融和は不可能であつて、「日米の親交を、恒久ならしめんとせば、一切の関係を、悉く平等の水準に措かねばならぬ。」日国民は衷心より日米親交を希望しているが、「一国の面目と、一国の安全」を犠牲にしてまでそれに尽くすことはできないといふ。⁽¹¹⁷⁾

右のように唱える蘇峰は予備会商が始まると、艦隊派の意見を代弁するかのように再び以下のように説いている。日本の国是は英米と国防上平等の位置に立つ、すなわち五、五、三の比率を訂正して三国均等にすることだ。米国から見れば日本は三で沢山であるかもしれないが、日本から見ればそれでは真の均勢を失うという不安があり、守るに不足するから訂正を必須とするのだと蘇峰は説く。⁽¹¹⁸⁾しかしながら、ここで見るように蘇峰の対米平等主義の論拠は不明瞭である。アメリカ五、日本三では守るに不足するというが、管見の及ぶ限りではその理由について詳しい説明がなされない。海軍戦術の専門家ではない彼は、自ら考えることによつて五対五の結論に至つたのではなく、他者からそうした意見を聞き、それをそのまま借用したに過ぎなかつたのではないか。

十二月二十日、予備会商は失敗に終わり、二十九日、日本はワシントン条約の単独廃棄をアメリカに通告する。もともとそうなることを予期していた蘇峰は、会商決裂後に米英「恫喝の声」が必ず日本の周りに鳴り響くことになるだろう、その恫喝の後に何が来るかは天のみぞ知る、と意味深長な言葉を記している。⁽¹¹⁹⁾それから一年後の

昭和十年十二月、第二次ロンドン海軍会議が日英米仏伊の間で開催されたが、日米の主張は予備会商のくり返しの交渉は再び暗礁に乗り上げ、翌十一年一月、日本は会議から脱退し、同年末のワシントン、ロンドン両条約の失効によって海軍軍備無条約の時代を迎えることになる。その過程で蘇峰は従来と同様に、対米六割比率の撤廃と「国防平等権」の獲得を執拗に主張し続けた⁽¹²⁰⁾。しかしその論拠は、管見の及ぶ限りではやはり不明瞭なままであった。

以上見たように蘇峰は、日米親交上、人種平等とともに海軍軍備の平等が不可欠である旨を十分な理由説明を行わずに、一切の妥協を認めない強硬な態度で唱え続けた。もともと戦術的な見地からいうと、彼の行ったような要求には一定の根拠があった。アメリカとの戦争を想定した場合、日本海軍は西太平洋での主力艦隊の交戦において五分五分か、それをわずかに上回るチャンスを得るため、伝統的に対米七割が必要であると考えてきた。しかしロンドン予備会商当時、艦船、兵器と航空機の進歩によって太平洋の戦略的距離は短くなり（航続半径は大正十一年のワシントン会議当時から二倍になった）、日本が漸減邀撃作戦を行うことは一層困難となった。その結果、昭和九年春までに日本海軍はその戦略的状况を容認できないものとし、部内の作戦担当者は「不平等」条約を廃棄し、ロンドン予備会商でパリティを要求しなければならないと考えた⁽¹²¹⁾。

しかしながら日本に対して現行条約の維持を唱えるアメリカ海軍にも言い分があった。予備会商の代表となったウィリアム・H・スタンズレー (William Harrison Standley) 作戦部長は、ハル國務長官から「ワシントン、ロンドン両会議で定められた日米間の」比率が軍縮システムに不可欠なものなのかどうかを問われ、次のように答えている。それはどのような犠牲を払っても維持されなければならない、なぜならアメリカは第一にそれなくして極東で力を行使できない、第二に我々は西太平洋での防備制限を受け入れる代わりにそれを手に入れたからだ⁽¹²²⁾。このようにスタンズレー作戦部長は述べたが、その一方で彼は潜水艦と重巡洋艦を求める日本を満足させ得る讓

歩も考えており、これを同時期、その実現の不可能性を認めながらも「完全なパリテイ、一〇対一〇の比率」を要求していた大角岑生海相、あるいは加藤寛治、末次信正連合艦隊司令長官以下の艦隊派、蘇峰らの妥協を許さない態度と比べると、スタンドレー作戦部長の方が余裕をもって相手に臨んでいるのは明瞭である。

なぜ蘇峰は戦術の専門家でないにもかかわらず、海軍軍備の平等に強くこだわったのであろうか。その理由として考えられるのは、第一に「米国から圧迫され続けてきた」という被害感をもっていたこと、第二にアメリカの海軍史家アルフレッド・T・マハン (Alfred Thayer Mahan) の影響を受けた後、「日本に海上権力抗争を挑むアメリカ」の固定観念を抱くようになっていたことの二点である。まず第一のアメリカから圧迫されるといふ被害感であるが、蘇峰の認識によれば、ペリー来航以来八十年間、米国はいつも起ち身となって問題を起し、日本は受け身を余儀なくされてきたという。⁽¹²⁵⁾ 日本はペリーの砲艦外交によって開国を強いられ、その後も人種面ではカリフォルニア州排日土地法、排日移民法によって屈辱を浴び、軍縮面ではワシントン会議で「一たび叩頭」、ロンドン会議で「二たび叩頭」させられたというのが、かねてからの彼の見方であった。⁽¹²⁶⁾ それ以外にもいわゆる「不平等条約」(安政の五カ国条約)、ロシアの満洲進出、三国干渉や黄禍論、パリ講和会議における人種的差別撤廃提案の却下などを通じて、アメリカを含む西洋諸国から絶えず抑圧されてきたという思いが蘇峰の根底にあり、そうした被害感が消えることがなく、これが蘇峰をして欧米に対し普通以上に過敏な反応をとらせることになった。ただでさえ西洋諸国を疑惑の目で見がちな蘇峰は、欧米が日本に不利であると映じる行動をとると、またもや彼らは日本を見下し、圧力を加えてきたという過剰反応に駆り立てられたのである。ロンドン予備会商、第二次ロンドン会議に臨んだ彼は、東洋を白人の私有物と考える英米が「優越感」、「恫喝主義」をもって日本に六割比率を強制していると痛憤したが、それは現実のアメリカというよりも、アメリカのイメージに対する怒りであった。

この被害感から脱却するためには、日本がアメリカに対して強く主体的な態度をとることが必要であり、そのために対等の軍備要求に執念を燃やしたのである。そうした彼にとって第二次ロンドン会議で日本が妥協せず、会議から脱退したことは、たとえ要求が容れられなくとも、アメリカからの圧力をはねかえした痛快な出来事として受け取られた。彼によると会議における永野修身、松平恒雄両全権の態度は、従来の「英米に屈従した全権の」それとは全く異なるもので「久し振りに溜飲が下つた」という。さらに、わが公正平等主義は欧米の比率不平等主義のために破れたが、わが国の首につながれた「比率不平等の鉄枷」だけは解除することができた。それだけでも画期的進歩であって、今後日本は世界のために「欧米人の優越感を一掃」して、彼らを幾千百年の迷夢から覚醒させていかなければならないとする。⁽¹²⁸⁾ここで表れているように、蘇峰にとって海軍軍縮問題は安全保障、軍事戦略だけでなく、国家のプライドがかかった名誉の問題であり、同時に彼自身の内面における被害感、劣等感の連鎖からいかに脱却するかという問題であった。第二次ロンドン会議からの脱退によって蘇峰は一時的なカタルシスを味わうことができた。しかし五十年以上にわたってその心に深く刻み込まれた「日本を圧迫するアメリカ」のイメージは消えることなく反復的によみがえり、そこから彼は逃れることができず、日中戦争期になるとさらに「日本を追い詰めるアメリカ」のイメージを描き出し、それに悩むことになる。⁽¹²⁹⁾

蘇峰が海軍軍備の平等にこだわった第二の理由として、マハンの影響を経て「日本に海上権力抗争を挑むアメリカ」の固定観念をもつようになっていたことを考えなければならぬ。周知のようにマハンは、大陸国（ランド・パワー）と海洋国（シー・パワー）の対立を軸とする地政学的な観点に立ち、海外への経済進出をめざす海洋国にとって海運業、商船隊と海軍力による海の支配、制海権の掌握が重要であることを説いたが、⁽¹³⁰⁾蘇峰は明治二十年代にマハンの『海上権力の歴史に与えた影響——一六六〇——一七八三年』（*The Influence of Sea Power Upon History, 1660-1783*）に見られる考え方を受容し、海上権力が国家の盛衰を左右するとの考えにもとづき、日本

とアメリカが太平洋の海上権力を争うようになる予感した。さらに明治三十年代の日露戦争前よりアメリカが将来、中国大陸に大規模な経済進出を行うであろうと恐れ、第一次大戦期になると中国市場を狙うアメリカが日本に対して海上権力抗争を企図し、米海軍による対日渡洋作戦を計画しつつあると見るようになっていた。⁽¹³¹⁾このようにマハンのシー・パワー思想を延長させて日米海上権力抗争、より正確に言えば「中国市場への進出を目指して日本に海上権力抗争を挑むアメリカ」のイメージを抱くようになった蘇峰は、日中戦争前の時期、そうした見方をさらに強めていた。

このようにアメリカの対日戦争を恐れる蘇峰は、昭和七年一月末に勃発した第一次上海事変の際、米海軍が演習終了後も主力を太平洋に集中させたままにしたことをもって対日戦争の一步手前まで行ったと考え、同国の出方を警戒していたが、⁽¹³²⁾さらに昭和八年六月、アメリカが二億三、八〇〇万ドルを支出して航空母艦二、重巡洋艦二、軽巡洋艦四、駆逐艦二一、潜水艦四、合計三三隻を建造することを決定すると、以下のように身を固くした。太平洋における米国海軍の態度が日本を「威嚇」しつつあることは明白な事実である。米国がさらに莫大な海軍を建設するならば、日本も安閑として傍観するわけにはいかない。大海軍さえ建造すれば日本は螳螂の斧をもって米国に立ち向かう敵愾心を失うだろうと速了するのは、日本の国民心理に対する「アメリカ側の」錯覚の骨頂であるという。⁽¹³³⁾

さらに彼は以下のように述べている。日本が太平洋で占めるべき位置は国運を賭しても失墜すべきではなく、これを把持するには「一も海軍、二も海軍、三も海軍である。……海軍無ければ、太平洋に於ける海権は全滅と覚悟せねばならぬ。」もし日本帝国が「太平洋の海権」を失墜すれば、台湾、朝鮮の統治も覚束なくなり、満洲、シナ、東亜への影響力も失い、大陸経営の方策と東亜振興の企図は画餅となるであろう。そのとき日本は内地の守備さえも危機に瀕し、一から十まで「太平洋向岸の一大有力国」〔アメリカ〕に叩頭する以外になくなる。「日

本が東亜に於て、其の指導者たるの立場にあるは、少くとも太平洋一半〔西太平洋〕の海権を、日本が把持してゐるからだ⁽¹³⁴⁾という。ここで用いられる「海権」とはマハンのいう海上権力に他ならない。西太平洋においてアメリカよりも優勢な海軍をもたなければ、同国との海上権力抗争に敗れ、海上権力を失えばアメリカの覇権が東太平洋から西太平洋にまで及び、日本は東アジアの支配権とリーダーシップはもとより独立自体が危うくなり、アメリカのなすがままの存在に墮ちるといわけである。そうした事態を防ぐためには、アメリカに西太平洋の海上覇権を握らせない、すなわち米海軍の対日渡洋作戦を未然に阻止できる、あるいはもし作戦が発動されても米艦隊を撃滅できるだけの軍事力が絶対必要となる。そのためには「借金を質に置いて、海軍力をば、充実にせしめたい⁽¹³⁵⁾」、要するに日本は大海軍主義をとるべきだというのが蘇峰の考えであった。

右のように「アメリカの対日海上権力抗争」を恐れる彼は、当時軍部から発信され、ジャーナリズムの一部を賑わせていた「一九三五～三六年の危機」説によつて不安を高め、自らもこの説を口にしていた。よく知られるようにそれはワシントン、ロンドン条約を再検討する軍縮会議（第二次ロンドン会議）の予定された昭和十年から兩条約の有効期限である昭和十一年末にかけて日本の海軍力が劣勢となり、対米国防の危機が生じると警告するものである。遅くとも昭和八年夏より蘇峰は、「日米海軍勢力の逆転期」一九三六年が刻々と迫っていると⁽¹³⁶⁾、上海事変当時の日米関係はまさに「一髪千鈞の危機」にあつたが、米国がこの態度〔米海軍主力の太平洋集中による威嚇〕をくり返さないと誰が保証できようかととして自ら危機説をくり返し唱えている⁽¹³⁷⁾。その上で昭和九年、ロンドン海軍予備会商が開催されると、米国は劣勢比率を強制することによつて「日本をその海軍脅威下に置き、その仁恵を仰がせるのでなければ満足できない⁽¹³⁸⁾」としてさらに身構えた。

以上のように「日本に海上権力抗争を挑むアメリカ」「海軍力によつて日本を支配下に置こうとするアメリカ」を蘇峰は恐れた。アメリカが優勢な海軍力をもつことによつて日本を脅し上げ、西太平洋の覇権、東アジアの支

配権を手に入れようとしていると見たのである。しかしながら蘇峰の認識と現実の間にはずれがあった。ここで当時のアメリカ側の状況を見ておくと、ローズヴェルト大統領が東アジアにおける日本の意図を怪しみ、それを警戒し、米海軍の再構築が必要であると考えていたことは確かである。⁽¹³⁹⁾しかしその最大の関心事はあくまで大恐慌からの回復にあった。⁽¹⁴⁰⁾昭和八年三月、ローズヴェルトが大統領に就任したときアメリカ経済は崩壊に近づき、国民総生産(GNP)とあらゆる商品、サービスの市場価値は昭和四年当時の三分の一もなく、国家の歳入は半分まで下がり、五千の銀行が破産し、九百万の貯蓄預金が壊滅し、失業率は約二五パーセントに達して千五百万人以上の労働者が職を失っていた。そうした中で大統領は、恐慌からの回復と海軍建設の双方を達成する方策を見出し、八年六月、公共事業の一環として全国産業復興法(NIRA: National Industrial Recovery Act)により二億三、八〇〇万ドルを建艦に充当したのである。⁽¹⁴¹⁾これが先に見たように蘇峰をして、アメリカは日本を「威嚇」していると感じさせたのであった。アメリカ海軍の拡張はこのときからスタートし、さらに翌九年三月にはヴィンソン・トランメル法(Vinson-Trammell Act)の成立によって、以後八年間に艦船一〇二隻、航空機一、一八四機を製造することとなった。そうしたアメリカの動きに蘇峰は一層身を固くしたが、しかしながらそれはアメリカの一方的な軍拡というものではなかった。当時、日本、イギリス海軍はワシントン、ロンドン条約の割り当てまで建艦しつつあったが、アメリカ海軍は条約の定めた限界まで建造しておらず、ヴィンソン・トランメル法によって条約のリミットまでの建艦を目指したのである。以後、「条約艦隊」の建設は徐々に進められたが、第二次ロンドン会議が開かれた一九三五年末の時点では、まだ条約の限度まで至っておらず、その間、米日海軍力の比率は昭和八年の終わりに一〇対七、十年の終わりに一〇対八であり、米海軍に比して日本海軍は地域的優越性を維持していた。⁽¹⁴²⁾その間、経済の立て直しを優先事項とするローズヴェルトはヨーロッパ、東アジアでのトラブルから離れていようと固く決心しており、ワシントン、ロンドン条約を有効のままにしておくことを強く希望

し、海軍競争を起こすことは彼にとつて不本意なことであつた。⁽¹⁴³⁾ またアメリカ海軍は対日作戦計画オレンジ・プランをもつていたが、それは海軍部内だけのもので国家戦略ではなく、⁽¹⁴⁴⁾ アメリカ政府に中国をめぐる日本と戦うという政策はなかつた。⁽¹⁴⁵⁾

右のような状況 ①アメリカ政府の最大関心事は大恐慌からの回復であつて、中国市場をめぐる日本に戦争を仕掛ける意思はなかつた、②アメリカ政府は経済回復の一環として海軍拡張を始めたが、それは条約制限内においてなされ、一九三五年末においても米日比率は一〇対八で、西太平洋において日本が優勢のままであつた) を見ると、蘇峰の考え ①中国市場を狙うアメリカは海軍拡張によつて日本を威嚇している、②それに対抗できる海軍をもたなければ日本は西太平洋の海上権力を失ひ危機に陥る、③その危機は日米海軍の勢力が逆転した一九三五、三六年に生じる) は現実とずれていたことがわかる。アメリカは日本と戦う気がないにもかかわらず、蘇峰はアメリカ海軍の対日侵攻に脅え、それへの対抗に頭を悩まし、危機説を増幅した。彼はマハンの思想から、日本とアメリカが西太平洋と東アジアの支配権をめぐる国家の浮沈をかけた生存競争的な海上権力抗争を行つていると考えた。そうした勝つか負けるか、生きるか死ぬかの強迫観念をもつていたからこそ、アメリカを猜疑し、「日本を恫喝している」と必要以上に恐れ、その結果、アメリカに対する軍備平等要求へと駆り立てられていったのである。⁽¹⁴⁶⁾ すなわち蘇峰は幻影に怯えて一人相撲をとつている面が強かつた。幻の「アメリカの対日海上権力戦争」という固定観念を抱く彼は、それを出発点として一方では日米親交論を説き、アメリカの対日戦争を防ごうと焦慮し、他方では米海軍の対日侵攻を未然に阻止できるだけの海軍力を保持する必要性を訴えたのである。

ところで蘇峰の主張は艦隊派のリーダー加藤寛治のそれとよく似ている。二人に共通するのはまずマハンの戦略思想にもとづいて日米関係をとらえていたことである。次に二人は、日露戦争後の米西海岸における日本移民排斥運動によつて反米感情に火がつけられ、大正二年にカリフォルニア州で排日土地法が成立した後は、日中連

合、アジア・モンロー主義を考えるようになっていく。さらに二人は、アメリカが攻勢的海軍を建設しつつ中国市場を狙い、日本との戦争へと突き進むことを予想していた点でも共通する。⁽¹⁴⁷⁾このように蘇峰と加藤の対米観は重なり合う部分が多いが、彼らは明治期より知り合いの間柄にあった。ただし両者がどこまで情報、意見の交換を行っていたかは明らかではない。⁽¹⁴⁸⁾

一方、蘇峰は海軍のスポークスマンとして論壇で活躍していた軍事普及部幹事、関根郡平海軍大佐と相互に影響を与え合っていた。関根の著書『皇国の危機 一九三六年に備へよ』を読んだ蘇峰は、以下のように持てはやしている。同書によって自分は米国がいかなる海軍力をもって我に対しているか、信憑すべき事実にもとづく説明を聞くことができた。立作太郎博士は関根大佐を「日本のキャプテン・マハン」と呼んで高く評価したが、それは誉めすぎではない。マハン大佐の著作は実に「画時的の名著」であるから、関根大佐の博学能文をもってしてもマハン大佐の史的卓識と争うことはどうかと思うが、その憂時警世の経国的文字としてはマハン大佐の企て及ぶところではあるまいと蘇峰は称える。⁽¹⁴⁹⁾ここで関根『皇国の危機 一九三六年に備へよ』の内容を見ておくと、関根はマハンにならってシー・パワーが国家の発展に相関することを強調した上で、以下のように説いている。「日本にとって」海上での防禦は一〇対六では難しく、一〇体一〇のパリティを保持しなければならぬが、米国海軍は一〇対六の比率を保ちさえすれば日本の戦意を挫き、戦わずして勝つことができると考えているようだ。現在「実に大規模の造艦振り」を示している米国海軍の力が一層増大したとき、わが国に向かつてどのような態度に出るか寒心に堪えず、我々は海軍軍備の充実を一刻も閑却してはならないと関根はいう。⁽¹⁵⁰⁾全国産業復興法、ヴィンソン・トランメル法にもとづき再構築を開始したばかりのアメリカ海軍は直ちに「大規模の造艦振り」を見せたわけではなく、その軍拡も条約の制限内で行われたものであったが、そのように日本への脅威を誇大に描き、危機のムードを煽る関根の著作を読んで、蘇峰は「日本に海上権力抗争を挑むアメリカ」のイメージをより

一層強めたであろう。他方、関根も蘇峰の新聞コラムを読んでおり、「アメリカ」起ち身、日本「受け身」という蘇峰と同じような被虐感をもち、蘇峰の文句を引用することによって自説を強化している。⁽¹⁵⁾このように二人は共鳴、作用し合っており、海軍戦備の素人である蘇峰にとって関根は自己の意に沿った形で軍事知識を提供してくれる好都合の存在であったといえる。なおその後も両者の関係は続き、関根は新著『躍進日本と海洋発展』を蘇峰に寄贈し、これに目を通した蘇峰は「いかにも得益少なくなかった」と誉めるとともに、関根大佐が述べるように海洋発展のためにはわが海軍力の充実が必須の要件である、日本国民は大いに海洋的気分を発揮し、海洋的趣味を存養し、海洋国民たる資格を成立させることが緊要であるとして、マハン思想にのっとりた海軍拡張論を唱えている。⁽¹⁶⁾蘇峰の知識源の一つとして関根のような海軍士官がいたことを指摘しておきたい。

以上、本章では蘇峰による日米親交のための第二条件、すなわちアメリカは人種ならびに海軍軍備の両面において日本を平等に扱うべきだという主張を考察した。蘇峰はアメリカ人の人種偏見、「自己優越感」に激しい怒りを抱き、アメリカが独立宣言の主旨にならって日本人を同じ人間として平等に扱わなければ日米融和は実現しないと訴えた。アメリカ人に反省を促す彼は表向きには平和的手段をとる旨を述べていたが、その心の奥には「欧米人の優越権に相当の制裁を与える」という復讐願望の炎がゆらめいていた。また蘇峰はロンドン軍縮予備会商、第二次ロンドン海軍会議をめぐる対米六割比率の撤廃と日米五対五の「国防平等権」の獲得を、一切の妥協を認めず執拗に主張し続けた。なぜアメリカとの軍備平等にこれほど執着したのかといえば、第一に「米國から圧迫され続けてきた」という被害感をもっていたため、第二にマハンの影響を受けた後、「日本に海上權力抗争を挑むアメリカ」の固定観念を抱くようになっていたためである。アメリカが日本に戦いを仕掛けるとの強迫観念に駆られたからこそ、逆に彼は日米親善を希望し、両国親交の条件を提示してみせたのである。

おわりに

本稿では日中戦争前の蘇峰のアメリカ観を検証した。結論として以下が指摘できる。

第一に蘇峰は日米親善を支持し、日米戦争に反対した。平和維持のために彼はアメリカが日本を正確に理解するよう求め、また自らも同国の知識を得ようとした。ただし蘇峰から見たアメリカは外（日本）に対して優越感をもち、内においては腐敗したマイナス要素の濃い国と認識されていた。

第二に蘇峰は日米親交を実現するための第一条件として、アメリカが東アジアにおける日本の特殊地位を認めるよう要求した。その背景にはアメリカのスムート・ホーリー法、イギリスのオタワ協定に代表される国際経済の保護主義的傾向があり、「満腹国」アメリカと「空腹国」日本の対立を鮮明に意識した彼は、心の奥でアメリカへの怒りをくすぶらせていた。

第三に蘇峰は日米親交を実現するための第二条件として、アメリカが人種ならびに海軍軍備の両面において日本を平等に扱おうよう要求した。アメリカ人の「自己優越感」に激しい怒りを抱く彼は、それに対して相当の制裁を加えたいという復讐願望を内に秘めていた。またアメリカが「日本を圧迫し続ける」、「日本に海上権力抗争を挑もうとしている」との強迫観念を抱き、そうしたアメリカのイメージから日本を守るべく軍備平等に固執した。右のようにアメリカが日本に侵攻するとの先入観、固定観念があったからこそ、蘇峰はそれを出発点として逆に日米親善を希望し、戦争の非を説き、両国親交の条件を提示するとともに、アメリカの「挑戦」に備えるべく対等の軍備を執拗に要求したのである。しかし実際にはアメリカ政府に日本と戦う意思はなく、したがって蘇峰の議論の出発点は事実にもとづくものではなかった。結局、彼は自ら描いた幻影のイメージと格闘していた面が強かったのである。

なお蘇峰が一面において日米親善論者であったことは確かである。しかし同時に彼は、心の奥でアメリカに怒りの炎を燃やし、同国への復讐願望を潜在意識の中に蓄積していた。蘇峰の論理でいくと、①日米親善を望む、②しかしそのネックはアメリカ人の人種の優越心であり、アメリカが日本の海軍力を劣勢状態に留めようとするところにある、③それを改めさせるためには制裁を加える、ないしはアメリカの圧力と優越心をはね返す必要がある、ということになる。つまり蘇峰はアメリカとの平和を求めながらも、その論理を突き進めると復讐的な態度を取らざるをえないというジレンマに陥っていた。そのため数年後に日米開戦を迎えた彼は、本来日米戦争に反対であったにもかかわらず、アメリカの人種的、経済的、軍事的「圧迫」に対する宿怨を晴らすための制裁を声高く唱えることになるのである。つまり彼は理性において日米親善論者であり、同時に感情においては対米復讐心を抱く反米家であったということである。昭和戦前期の蘇峰を日米親善論者、反米家のどちらか一方としてみずならば、彼の全体像をとらえたことにはならない。その両面を持ち合わせていたのが蘇峰の実像である。

最後にアメリカ海軍の威嚇、あるいは対日侵攻を恐れ、来るべき日米戦争を想定していた蘇峰は、アメリカの国力、富強をどこまで深く理解していたのだろうか。その一端を知る手がかりとして、蘇峰が手にした書物の一つ、藤原銀次郎『工業日本精神』をあげたい。日本実業界のリーダーの一人、王子製紙社長の藤原は昭和十年、アメリカ西海岸の製紙業界、産業界を見学し、この著書『工業日本精神』巻末に「米国工業の現状を観る」と題した視察記をまとめている。⁽¹⁵⁾その中で藤原はアメリカの長所をあげ、例えば同国の労働者が自動車を所有し、住居や食事に関しても日本の中流以上もしくは上流社会も及ばないほど豊かな生活をしていること、アメリカ人が日本人よりも責任感が強く、かつ機械の使用を好み、鉄橋建設などに見られるその優秀な技術、大組織による大事業は日本が及び得ないことを指摘している。しかしそうしたアメリカに対して日本が勝るものがある、それは日本人の勤勉努力、戦場でも工場でも一身を捨てて尽くそうとする日本魂、命がけの精神、工場操業における綿

密さ、用意周到、能率、すべての物を粗末にしない節約ぶりであるという。また未曾有の不景気の中、アメリカでは赤化宣伝者が跳梁跋扈を極め、どこへ行ってもストライキがあり、物資の供給が需要を上回った結果、大量生産主義と高賃金主義は全く行き詰っているとし、また会社設立などを見ても商業道徳は日本より悪く、挽材工場では驚くほど原料の無駄遣いが多いなど製紙工業の状況は日本より大いに優るものは発見できず、彼我の優良工場を較べれば日本に操業上、一日の長があるという。以上のように観察する藤原は結論として、自分たち経済人が「師匠として崇め奉つてゐた」アメリカの内情には少々意外なものがある、この旅行を通じて自分はそれまで「幾らか米国を買被つてゐた」ことに気がついたと記している。

以上の観察記が発表されると直ちに目を通した蘇峰は、これを読んで「痛快の感」に勝えないと述べている。彼によれば（「アメリカを訪れる」）大概の視察者は、米国が最新式の機械を用い、最高能率をあげ、大量の生産をなす驚異的な光景に目まいを感じ、恐れ惑い、絶望的嘆声を漏らすものだが、著者の藤原は同国の長所を認めるとともに、短所、弱点を指摘し、その「決して深く恐るゝに足らざる」所以を断言している。ここに至って「我等の痛快味は、更らに一段を加へ来る。」¹³⁵けだし近來の好著、快著であるというのである。

ここで見られるように蘇峰は、アメリカ工業力の弱点が指摘された個所を見て、痛快感をもった。日頃よりアメリカに憤懣を覚える彼は、同国の長所よりも欠点に目が行きがちであり、それを喜んで受け入れた。そこにはアメリカの弱点を見たい、同国への恨みを晴らしたいという感情を見て取ることができる。理性では日米親善を唱えつつも、感情面ではやはりアメリカに鬱憤を晴らしたいという情念が彼の心の底流に横たわっていたのである。その情念がアメリカの真の姿、その富強から蘇峰の目をそらしてしまうことになる。

アメリカに鬱屈した思いを抱き続ける蘇峰は昭和十二年六月、第一次近衛文麿内閣が誕生すると、「雲破れて日輪踊り出し」「青天白日を望む」かのような印象を受け、近衛首相が清新な外交政策を打ち出すことを期待し

た。⁽¹⁵⁶⁾しかし七月に日中戦争が始まり、アメリカ、イギリスが中華民国を援助するようになると、蘇峰のアングロサクソン・コンプレックスは募り、その閉塞感はいくくのである。

(1) 秦郁彦『太平洋国際関係史―日米および日露危機の系譜一九〇〇―一九三五―』福村出版、一九七二年、第七章「一九三二年の日米危機」を参照のこと。第一次上海事変をめぐる日米関係の緊張とそれに続く米艦隊主力の太平洋残留を背景として、昭和七年の日本言論界では日米戦争論が氾濫した(同書二〇八頁)。

(2) 秦前掲書によると、日米危機は昭和八年十一月、米偵察艦隊の大西洋帰航発表を契機として急速に減退し、昭和九年に入ると日米未来戦物語は市場から姿を消していった(同書二三三頁)。ただし全く無くなったというわけではなく、昭和八年には平田晋策『われ等若し戦はば』、福永恭助『小説・日米戦未来記』など、昭和九年には石丸藤太『太平洋危機突破論』が出版されている(同書二二八頁を参照)。

(3) 社實は会長、社長に次ぐ重役職として位置づけられていた。またコラムは『東京日日新聞』にのみ「日日日より」の名が付されていた。

(4) 伊藤正徳「現代新聞と新聞記者」『経済往来』昭和十年四月号、一〇巻四号、巻末五三頁。

(5) ちなみに『時事新報』を退社したばかりのジャーナリスト伊藤正徳は、蘇峰が抱り所とした『東京日日新聞』の紙面傾向を次のように評している。同紙は面白くてスクープも割合に多く、編集が華やかで記事も豊富であるが、「煽情的記事」が朝日よりも多い。「時流の通りに進み、随つて『主義』を印象せしむる所が浅い。……煽情的なことは、大新聞として慎しんで貰いたい程度に濃厚だ。」東京で最大の発行部数を誇り、スタッフも充実し、岡実、高石真五郎以下の一流新聞人、錚々たる記者を擁し、蘇峰翁の存在はいうまでもないが、これらの人々がかつて煽情主義で売り出した当時のままの状態を依然として変えないことは、私の常々不思議に思っているところである(伊藤正徳『新聞生活二十年』中央公論社、昭和八年十二月、四九二―四九四頁)。伊藤のいうように『東京日日新聞』の記事にはエモーションナルなものが多く、それが同紙の特徴の一つになっていた。もともと伊藤は蘇峰を高く評価しており、蘇峰がまだ『国民新聞』に執筆していたころ、「私は一週間に一度でも、文章修想の上に学び得れば満足であると考へて(その文章を)読み続けたものだ」、蘇峰氏の存在が『国民新聞』を一流紙の格に保ったことは争えないとして

いる（同書五五七―五五八頁）。なお、とくに満洲事変と日中戦争勃発後における東京日日新聞（および他紙）のセンセーショナルリズムについては、掛川トミ子「マス・メディアの統制と対米論調」『日米関係史 開戦に至る十年（一九三一―四一年）』4 マス・メディアと知識人（東京大学出版会、一九七二年（新装版二〇〇〇年））所収が詳しく考察している。同論稿は蘇峰についても言及し、『東京日日新聞』は「ウルトラ・ナショナルリズムの雄叫びと煽動を盛り込んだ」蘇峰の「日日だより」に示されるような政治的センセーショナルリズムを基調とし（二九頁）、一九三一―四一年の期間、蘇峰はかつての思想家としての残照を失い、「単なる煽動業者」となり（七二頁）、その「煽動記事はそれ以後の挙国一致ムードを醸成するうえで重要な役割を演じた」（一〇頁）としている。

〔6〕 例えば『中央公論』は蘇峰 徳富猪一郎「明治の大記者 福地桜癡居士」昭和十年四月号（五〇年四月号）、「大陸旅行者―専ら支那古代の入竺僧法顯に就て語る―」昭和十一年四月号（五一年四月号）、「改造」は「政治家としての西郷南洲先生」昭和十一年二月号（一八卷二号）、「キング」は「七十余年長途の追分」昭和十一年十二月号（二二卷一四号）がある。また『実業之日本』は「成功と不成功の要素一二」昭和十年七月一日号（三八卷一三三号）、「力及び力の使用法」昭和十一年一月一日号（三九卷一号）、「人間生活の全面」昭和十二年一月一日号（四〇卷一号）、「四十を中心として」昭和十二年七月一日号（四〇卷一三三号）、「歴史公論」は「輪郭の大なる日本人」昭和十一年十月号（五卷一〇号）、「古典研究」は「太平記」偶言「昭和十二年一月号（二卷一号）」がある。

〔7〕 蘇峰会は昭和五年二月二十一日に設立され、蘇峰の提唱する皇室中心主義を宣揚することを目的とし、そのために蘇峰を中心とする事業の後援、国史の研究と普及、談話会、講演会の開催、および蘇峰の講演筆記、会誌の刊行などの事業を行うもので、旧国民新聞社員など蘇峰の薫陶を受けた人々が幹事を務めていた。事務所は東京市京橋区銀座の民友社に置かれ、年会費は一円で、会員が百名以上有する地方には蘇峰会支部を開くことができた（改正蘇峰会規則『蘇峯会誌』六年二輯、昭和十年十月、六一―六三頁）。昭和十一年十一月の時点で支部二四、会員一万人以上とされ（蘇峰会代表大久保利武「謝辞」『蘇峯会誌』昭和十一年第四輯、昭和十二年二月、六四頁）、最終的には支部約四十、会員数一万二千名に達し、支部長の多くは県知事、市長で、官界、教育界、青年団など中間指導者の参加が多かったという（和田守編「年譜」『明治文学全集 34 徳富蘇峰集』筑摩書房、昭和四十九年所収、四二―四四頁）。

〔8〕 拙著『近代日本人のアメリカ観 日露戦争以後を中心に』慶應義塾大学出版会、一九九九年、一一五、一三五頁。

(9) また彼の訓話が小学生の朝礼時間にNHKラジオ放送を通じて流されることもあった。昭和十年四月よりラジオ番組に学校放送用のプログラムが組み込まれ、朝礼時間には教師にとって知名の士、児童にとって「偉い人」(永田秀次郎、高橋是清、近衛文麿、長岡半太郎など)が十分間の訓話を行ったが(日本放送協会放送史編修室編『日本放送史上巻』日本放送出版協会、昭和四十年、三六八―三六九頁)、蘇峰もこの朝礼訓話を行っている。「小学生の間」(全学年)朝八・〇〇:朝礼「訓話」徳富猪一郎『東京日日新聞』昭和十一年五月四日ラジオ番組欄。このとき蘇峰は「恩を知ることが、人間として最も大切のことである、……その恩に報いるといふことを考へかつ努めねばならぬ、如何にして報いるかといふことは、各々が最善の力を尽して、各々の職分を尽すことである」といった内容の話を行った。

(10) 蘇峰は両紙夕刊第一面にコラムを掲げるだけでなく、朝刊に「近世日本国民史」を連載していた。

(11) 「近世日本国民史五十巻刊行(普及版)披露会」(昭和九年九月二十八日、於帝国ホテル)には床次竹二郎通相、町田忠治商工相、松田源治文相、小原直司法相、内田信也鉄道相といった閣僚のほか、頭山満、松岡洋石、久原房之助をはじめとする名士が出席した(『蘇峰会誌』五年二輯、昭和九年十月、七一―七三頁)。「蘇峰先生文章報国五十年祝賀会」(昭和十一年十一月五日、於帝国ホテル)では、祝賀会会長となった近衛文麿から「蘇峰徳富先生力文壇ノ老将トシテ明治大正昭和ノ三代ニ互リ一枝ノ筆ヲ提ケテ一君万民ノ理想ヲ首唱シ文化ノ使命ヲ体シテ国家ノ進運ニ貢献シタルニ至リテハ近世ノ歴史ニ於テ絶テ無ク……」との賛辞が寄せられ、さらに長與又郎(東京帝国大学総長)、中野正剛、鳩山一郎らが祝辞を述べた(『蘇峰会誌』昭和十一年第四輯、昭和十二年二月、四九―七五頁)。

(12) 野間清治「日本人」を造る書『蘇峰会誌』五年二集、昭和九年十月、五五―五六頁(近世日本国民史五十巻刊行披露会でのスピーチ)、野間清治「巨人の姿―中正の大道を行く者―」『蘇峰会誌』昭和十一年第四輯、昭和十二年二月、七六―七七頁(文章報国五十年記念祝賀会でのスピーチ)。

(13) 「徳川家蔵版 予約大募集 大日本史」『国民新聞』昭和三年九月十二日第一面広告を参照。講談社を私設文部省と評したのは蘇峰であった。

(14) 野間は、蘇峰先生が自分を含めた「聖代の民衆を育て上げられた」と感謝している(野間「巨人の姿」七六頁)が、その講談社を率いる野間を「育て上げ」たともいえる存在が蘇峰であった。また蘇峰は野間のような五十代ない

しそれ以上の年齢の指導層だけでなく、より若い世代からの支持も得ていた。日中戦争勃発の直前、慶應義塾大学が予科学生に「もつとも推奨するジャーナリスト」のアンケートを行った結果、蘇峰は二位の福沢諭吉以下を大きく引き離して首位となっている。拙著『近代日本人のアメリカ観』一七二―一七三頁。

(15) 徳富猪一郎「東郷元帥の棺側に随行して」『東京日日新聞』昭和九年六月六日。

(16) 早川喜代次「徳富蘇峰」徳富蘇峰伝記編纂会、昭和五十四年第二版、四八一―四九二頁。

(17) 「徳富本社々賓等に破格の賜謁／けふ御旅館へ御召し」『東京日日新聞』昭和十年四月七日、「たゞ感謝に堪へぬ友邦民衆の歓迎」／重ねての賜謁に破格の面目／徳富翁、感激を語る」『東京日日新聞』昭和十年四月八日。溥儀が読んでいたという同日朝刊の蘇峰歓迎の辞は、徳富猪一郎「満洲国皇帝陛下を迎へ奉る」『東京日日新聞』昭和十年四月七日。また溥儀が蘇峰に語った言葉の中身は、蘇峰 徳富猪一郎「日滿の精神的結合」『東京日日新聞』昭和十年四月十八日夕刊でも紹介されている。

(18) 蘇峰生「五、一五事件から何を採らんとする」『東京日日新聞』昭和八年九月九日夕刊。

(19) 蘇峰生「血盟団判決の教訓 其次には何物が来る可き」『東京日日新聞』昭和九年十一月二十五日夕刊。その他に蘇峰は天皇機関説問題について、自分は未だ「美濃部（達吉）博士の法政に対する著作を読まない」が、「天皇機関説の味方ではない。苟も日本の国史の一頁にても読みたらんには、斯る意見に与することは、絶対に不可能だ。……第一天皇機関など、云ふ、其の言葉さへも、記者は之を口にするを、日本臣民として、謹慎す可きものと信じてゐる」と嫌悪感を示した。蘇峰生「老書生の陳言 天皇機関説に付て」『東京日日新聞』昭和十年二月二十七日夕刊。また昭和十年八月の相沢事件について蘇峰は、「軍部中尤も前途に多望なる人物群中の一人を喪うた」として軍務局長・永田鉄山少将の死を惜しみ、現役、予後備を問わず「軍隊出身の諸巨頭に……其の猛省を促がす。……諸巨頭が、公の爲めに……一切の行き掛りを水に流して、……一致戮協して、軍の統制強化を図ることだ」と批判した。蘇峰生「雨降りて地固まる」『東京日日新聞』昭和十年八月十六日夕刊。さらに同事件について、「立場が違へば、視野も異なるは当然だ」、「銘銘の立場には、銘々の了見がある」、それなのに「己に殊なる者を毛嫌ひし、悉く之を排斥し去らんとするに到りては、是れ私情を恣にし、公事を横領せんとするもの」だとして「相手方の立場をも考慮する必要」性を説いた。蘇峰生「相剋の気分と協和の精神」『東京日日新聞』昭和十年八月三十日夕刊。また翌昭和十一年

- の二・二六事件後、蘇峰は軍部に「謙遜の美德」をもち「自制の功夫」たることを望む、軍部自身が協和一致し、陛下の軍隊をして真に陛下の軍隊たらしめよと忠言している。徳富猪一郎「勅語を捧読して、官民の自省を促がす」『東京日日新聞』昭和十一年五月六日夕刊。
- (20) 馬場恒吾「蘇峰自伝」を讀む」中央公論社刊『蘇峰自伝』広告「蘇峰自伝」は日本自伝^{ジャポニク}である／竟に五十年・大蘇峰感激して親書を寄せらるる」『東京日日新聞』昭和十年十一月十二日所収。
- (21) また蘇峰自身、馬場のいうような「多情多感」であることをよしとする考えをもっていた。蘇峰は吉野作造を評して、その眼孔は常識以上に出ず、「余りに頭脳がバランスを得過ぎて、天才に必須なる熱狂味を欠乏」している、それが物足りない^{物足りない}と批判している。蘇峰から見れば、吉野のようなクールな常識家でなく、人を動かす「熱狂味」を帯びた個性的な文章のスタイルをもった者こそがジャーナリストにふさわしいと考えられたのである。蘇峰生「閑談の閑談」『東京日日新聞』昭和八年十月六日夕刊。
- (22) 蘇峰生「国政の三拍子」『東京日日新聞』昭和八年十月二十四日夕刊。
- (23) 「帝国外交の大転換／英国の不信を機に／親米へ前進一步／懸案の『調停仲裁々判条約』／交渉開始の運び」『東京日日新聞』昭和八年六月十日。「排日移民法修正論 米国内に起る」『東京日日新聞』昭和八年七月二十三日社説。
- (24) Stephen E. Pelz, *Race to Pearl Harbor: The Future of the Second London Naval Conference and the Onset of World War II* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1974), 21.
- (25) 「米大使等が参列／盛な先賢慰霊祭／晴天に恵まれ、押寄せた人波／下田港の黒船祭り」「感動深し／グルー大使語る」『東京日日新聞』昭和九年四月二十三日夕刊。
- (26) 「紐育の賀陽宮殿下／本塁打王に御言葉を賜ふ」『東京日日新聞』昭和九年八月三十一日。「来朝の第一戦／ハーバード大学／帝大を屠る／文相・米大使のバッチリで／珍しい始球式」『東京日日新聞』昭和九年八月十九日。「米軍優勝す／人間弾丸メトカルフ／世界記録を生む／フールドではわが軍勝つ／日米陸上競技終る」『東京日日新聞』昭和九年九月十日。
- (27) 「近衛公を中心に／米国の輿論に聴く／言論界の雄一堂に／縦横論議四時間／紐育の大座談会」『東京日日新聞』昭和九年六月三十日。「日米の若人等が／卓を囲んで会谈／『話題』の中心は『国際問題』」『第一回学生会議開く』『東

京日日新聞』昭和九年七月十五日夕刊。

(28) 「背広で押通す／軍人の平和使節／あす横浜から渡米」『東京日日新聞』昭和十年八月二十二日夕刊。「よき日の朝／金港を包む国際色／竹下大将帰る／米野球選手、チエツコデ杯選手／憧れの日本へ来訪」『東京日日新聞』昭和十年十一月四日。「平和の提携／竹下大将語る」『東京日日新聞』昭和十年十一月四日。読み易さを考慮して現代仮名遣いに改め、句読点を補い引用した。

(29) 「多彩な『世界人名簿』／『三重苦の聖女』を筆頭に／浅間丸の豪華な船客」『東京日日新聞』昭和十二年四月十六日夕刊。「両陛下、ケラー女史に／親しく御握手を賜ふ／観桜御会に破格の光栄」『東京日日新聞』昭和十二年四月十七日。「『三重苦』の聖女／意を得たり／心眼明朗／ヒゲ総理と禅問答／午後は市民歓迎会へ」『東京日日新聞』昭和十二年四月十八日夕刊。

(30) 『ヘレン・ケラー全集』第一〜三巻、三省堂、昭和十一年〜十二年。沖野岩三郎『聖女へれん・けらあ』金星堂、昭和十二年四月。ヘレン・ケラー女史歓迎委員会編『ヘレン・ケラー小伝』ヘレン・ケラー女史歓迎委員会発行、平野書房発売、昭和十二年四月。園田基彦『聖女ヘレン・ケラーとはどんな人か』森田書房、昭和十二年四月。なお蘇峰が総代を務める財団法人光之村青年道場は、アメリカでの愛盲社会事業に役立ててほしいと金一封をケラーに寄付している。その際の書状の控が残っているが、蘇峰はケラーの名をよく知らなかったため、控の保存封筒に「エレニ、ケラーへ」と記している。昭和十二年五月五日付・ヘレン・ケラー宛光之村青年道場総代徳富蘇峰、安部磯雄連名書簡〔代筆〕、財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団・徳富蘇峰記念館所蔵。

(31) ただし蘇峰はそうしたアメリカの大衆文化を嫌っており、例えばジャズについて次のように述べている。「今日日本の音楽は、殆ど亜米利加流の音楽になつてゐる。所謂ジャズ、ジャズの音楽と云ふものは、これはアメリカの黒人坊の音楽であつて、それを亜米利加人が学んで、其の亜米利加人から日本人が受売りをしてゐるのである。……あ、云ふ風に、日本人が唯だ享楽に耽つて、肉欲以外に何にもないと云ふやうになつて、家族制度をぶつて毀して行く時に於ては、それこそ吾々は、レニンの手が独逸に及んだと同様に、日本の国家の基礎を、危くするやうになりはしないかと云ふことを心配するのであります。」蘇峰 徳富猪一郎「油断大敵 時局と現代社会相」『蘇峯会誌』昭和十二年第一輯、昭和十二年四月、三五頁、昭和十一年十一月二十三日の講演筆記。こうしたアメリカ大衆文化の享楽性が

日本の基盤を切り崩すという蘇峰の不安は、その後も消えることがなかった。そのため戦時中の彼は、「面貌は日本人でありながら骨髄を英米人にしたジャズに現を抜かず（大正末年から昭和初年の）銀座ボーイ」を厳しく非難している。蘇峰徳富猪一郎「アングロ・サクソンの正体（一）」『毎日新聞』昭和十八年三月十七日。また同じく戦時中、ある旅館で貴族富豪の子弟と思われる青年らが「酒に酔ひつ、米国流の音楽に打興じ、殆ど夜を徹して男女抱擁舞踏の楽しみに耽溺」していたことを知人から聞いた彼は、「かゝる国家非常時を無視するヤンキー輩」として怒りを露わにしている。蘇峰徳富猪一郎「伊太利政変と皇国④」『毎日新聞』昭和十八年八月二十八日夕刊。アメリカの文化が日本を墮落させているという蘇峰の思いは、強まりこそすれ、弱まることはなかった。

(32) 蘇峰生「日米親和の鍵」『東京日日新聞』昭和九年五月二十二日夕刊。

(33) 蘇峰生「第三者の口車に乗る勿れ 米国の識者に告ぐ」『東京日日新聞』昭和十一年二月十四日夕刊。

(34) 拙稿「少年期の徳富蘇峰とアメリカー一八六三〜一八八〇年」『同志社アメリカ研究』第三九号、二〇〇三年三月、二八―二九頁。拙稿「日露戦争前の徳富蘇峰とアメリカー明治三十年代を中心に」(一)『法学研究』八〇巻一〇号、平成十九年十月、四四頁。

(35) 秦『太平洋国際関係史』二二八、二七三頁。

(36) 蘇峰生「不謹慎なる言論は率直なる言論ではない」『東京日日新聞』昭和九年一月二十日夕刊。

(37) 同じ引用個所で蘇峰は語を継いで、自分は「隣国に対しても、諤々、敢言の友人たるを期するもの」、その言葉が率直であったため、しばしば非難攻撃の焦点となった経験をもつが、戦争、開戦といった眉の上に火がついたような恐慌的文句を吐き出した覚えはないと続けている。日米関係を憂えた彼は大正十一年、英語で「日米関係」(Tichiro Tokutomi, Sukesighe Yanagiwara trans., *Japanese-American Relations*, New York: The Macmillan Company, 1922) を出版し、その中でアメリカ人に媚びることなく正直な意見を示したという思いがあった。そのように隣邦にあえて直言する友人を目指してきた自分は、たとえストレートな言い方はしても、煽情的な言葉を用いたことはないというのであるから、ここで蘇峰がアメリカを意識しているのは明らかである。また一方で同じ時期、彼は「米国も、露国も」対日戦争熱を煽る第三者の煽動に乗らないようにしてほしいと強調し、日米、日ソ戦争の悪夢の両方を心配していた。蘇峰生「進んで大義を世界に宣揚せよ」『東京日日新聞』昭和九年一月二十五日夕刊。

- (38) 蘇峰生「第三者の口車に乗る勿れ 米国の識者に告ぐ」『東京日日新聞』昭和十一年二月十四日夕刊。
- (39) 同右。
- (40) 拙稿「第一次世界大戦期の徳富蘇峰とアメリカ―一九一四―一九一八年―」『法学研究』八二巻四号、平成二十一年四月、八七頁。
- (41) 蘇峰生「波高し太平洋」米国とその極東政策』『東京日日新聞』昭和十一年四月二十六日夕刊。
- (42) 蘇峰生「世界戦争はもう始つてゐる」に就て』『東京日日新聞』昭和十二年六月十五日夕刊。同書のタイトルは煽情的な印象を与えるが、その内容は新鮮な事実と犀利な観察で充実していると蘇峰は高く評価していた。
- (43) 武藤貞一「世界戦争はもう始まつてゐる」新潮社、昭和十二年四月、一五頁以下の「未来戦の驚異」、五〇―五三、九八―九九頁。
- (44) 蘇峰生「世界戦争はもう始つてゐる」に就て。
- (45) 武藤「世界戦争はもう始まつてゐる」二〇九、一二三―一二五、一九九、一九三、二二四、二〇七頁。
- (46) 蘇峰生「世界戦争はもう始つてゐる」に就て。
- (47) 同右。
- (48) 「日米の親善／世界平和へ貢献／総裁宮様令旨を賜ふ／米記者団を迎へて新聞協会大会」『東京日日新聞』昭和九年九月二十日。同記事によると、このとき日本新聞協会は東久邇宮総裁の令旨にしたがい次の決議を行った。「日米の親善は世界平和の骨子にして且つ日米両国の俱に共に基調とする所なり、而してこれを増進するは専ら吾人言論機関に關係ある者の重大なる使命にして且つその責任となす、而して日米親善を増進せしめんには、日米両国相互に、その真相を究明し、一切の陰翳を排除し両国の国際關係をして暢達明朗ならしむるにあり今回日米新聞記者の会合する目的實にこゝに存す、本大会は招待せる米国同業者の熱誠なる賛同により彼我戮協し、いよ／＼両国親善の目的に向つて最善の努力を効さんことを決議す」。
- (49) 同右。
- (50) 徳富猪一郎「四時佳興」民友社発行、明治書院発売、昭和十年五月、三五四―三五七頁。「来り見よ」とのタイトルが文章についている。読み易さを考慮して文体を現代風にやや改めた。

(51) 蘇峰生「The Spirit of Japan (日本精神)」『東京日日新聞』昭和十年二月七日夕刊。

(52) Ernest Adolphus Surge, *The Spirit of Japan* (Tokyo: The Yurakusha, 1905, 卷末に日本語奥付もあり、有楽社、明治三十八年九月十三日発行となっている) の冒頭に大隈重信、尾崎行雄、蘇峰の英語序文が掲げられている。その中で蘇峰はおおむね以下のように述べている。昨年(明治三十七年)、私はストージ夫妻とお目にかかり、このわがアメリカの恩人の歓迎会で挨拶する喜びを得た。ストージ博士は日本と日本国民の良き友であり、その立派な品性と洗練された教養の中に、太平洋の此方にいる我々は光と導きの源泉を見出す。日本を愛することなく理解することはできないし、日本を理解することなく愛することはできないが、この美しい本を熟読する者はいかに著者が真に日本を愛し、かつ完全に理解しているかを直ちに納得するに違いない。ストージ博士の詩は平易な言葉で事実があるがままに描写するという点で白楽天(白居易)のそれと同じ部類に入るかもしれない。日本が生んだ最高の国民的詩人の一人、頼山陽も日本の精神をこれほどまでに多方面から歌うことはできなかった。博士の詩を読む日本人は鏡の前で自分を見ているかのように感じることだろう、と蘇峰は褒め称えている。Ichiro Tokutomi, "Preface," xi-xiv. なお同書(明治三十八年、第二版)に収録された詩のいくつかを例として拙訳にて掲げておく。

万歳、われらの天皇誕生日！ 幸せの鐘をすべて鳴らせよ！ 臣民はいう、喜んで「国王が長生きしますように！ 万歳！ 万歳！ 万歳！」と(「天皇誕生日」)

しかし死ぬ前に、彼(楠木正成)は呼び出した その側に息子を、そして与えた 自身の刀と名誉の巻物を 家伝来の、そして厳しく命じた それらをもに汚さぬようにせよ、そして帝のために生きよと それから彼は誓った、七度の生涯を 捧げるであろう 主に奉公するため 幾度となくこの世に戻るたびに 彼は勝利を得るまで戦うであろう。これが彼がめられる所以だ(「楠木正成」)

富士山、比類のない山よ、陸からも海からも見える。全世界を探しても、なんじに似たものは他にない。なんじの高さに完璧な数の 月日が表現される。なんじの存在に人は気づく 平和と休息の意味を。なんじの頭は年とともに

白いが、その心には火が眠っている。何物もなんじにはまず価値することができない。最高の芸術をもつてしても。富士山、比類のない山よ、わが記憶にとどまれ！ われらの生命はそのわずかしか生み得ない。なんじの完全な対称性については（富士山）

(53) 蘇峰生「The Spirit of Japan（日本精神）」『東京日日新聞』昭和十年二月七日夕刊。

(54) 蘇峰生「善人は国の宝 旭日丘漫筆（一〇）」『東京日日新聞』昭和八年八月十八日夕刊。これによると、富士山を愛したスタールは、やはり富士山を愛し、その文献蒐集で知られたジャーナリスト曾我部一紅の碑を須走浅間神社（東口本宮富士浅間神社）に建てる際、蘇峰に碑銘を書くことを依頼し、昭和七年八月二十五日、蘇峰とともに建碑除幕式に参列した。なおスタールは昭和八年八月に亡くなり、富士登山道にその墓碑が建立されたが、この碑文も蘇峰が記している。

(55) Herbert Agar, *What is America?* (London: Eyre & Spottiswoode, 1936). 同志社大学今出川図書館徳富文庫所蔵の蘇峰旧蔵書。本文二八九頁のうち約六割にあたる一七五頁まで、主に赤鉛筆により蘇峰の書き込みがなされている。一〇八頁に「12.27」と記されており、昭和十二年二月七日前後に読んでいることがわかる。Arthur Bryant, *The American Ideal* (London: Longmans, Green and Co., 1936). 財団法人石川文化事業財団・お茶の水図書館成賢堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書。本文二五九頁の全体にわたって、赤鉛筆により蘇峰の書き込みがなされている。四二頁に「昭和十二年二月 清快楼にて I・T（徳富猪一郎のイニシャル）」、九八頁に「12、1、3 於熱海清快楼 I・T」（二五九（最終）頁に「12 1、5、熱海にて I・T」と記されており、昭和十二年一月二日頃から五日にかけて読んでいたことがわかる）。

(56) Agar, *What is America?*, 73, 107. アンダーラインが引かれた箇所にはサイドラインも記されている。

(57) *Ibid.*, 111. 該当箇所の右余白にサイドラインが引かれている。

(58) Bryant, *The American Ideal*, 13, 16.

(59) *Ibid.*, 50, 91, 68. 「そのときから彼は奴隷解放の意見を、筋金が入ったことを説明する」に該当する箇所の右余白に二重のサイドラインが引かれている。

(60) *Ibid.*, 17. 蘇峰がアンダーラインを引いたのは独立宣言の次のような個所である。

われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の諸権利を付与され、その中に生命、自由および幸福の追求のふくまれることを信ずる。また、これらの権利を確保するために人類の間に政府が組織されること、そしてその正当な権力は被治者の同意に由来するものであることを信ずる。そしていかなる政治の形態といえども、もしこれらの目的を毀損するものとなった場合には、人民はそれを改廃し、彼らの安全と幸福をもたらすべしと認められる主義を基礎とし、また、そのような権限の機構をもつ、新たな政府を組織する権利を有することを信ずる。(訳文は高木八尺訳「独立宣言」松本重治責任編集『世界の名著 33 フランクリン ジェファソン ハミルトン ジェイ マティソン トクヴィル』中央公論社、昭和四十五年所収、二二三頁、「独立宣言」の第二段落目。)

- (61) 拙稿「第一次世界大戦期の徳富蘇峰とアメリカ」七二―七五頁。
- (62) Bryant, *The American Ideal*, 117. 『草の葉』のタイトルにもアンダーラインが引かれている。
- (63) Bryant, *The American Ideal*, 117. 左余白にサイドラインがある。邦訳はホイットマン作、酒本雅之訳『草の葉』上、岩波文庫、二〇〇〇年第二刷、一六〇頁所収の「ぼく自身の歌」第二四節。
- (64) Bryant, *The American Ideal*, 119. 左余白にサイドラインがある。邦訳は酒本訳『草の葉』上、二四三頁所収の「ぼく自身の歌」第五一節。
- (65) Bryant, *The American Ideal*, 117-119. ロングフェロー、ブライアントの名前にもアンダーラインがある。
- (66) *Ibid.*, 125, 119.
- (67) *Ibid.*, 127.
- (68) Agar, *What is America?*, 95, 107, 98, 73. 「国家的悪魔」を含む一節の右余白にサイドライン、ジェイ・グールド、ロックフェラー、ジェファソン、リンカンの名にそれぞれアンダーラインがある。
- (69) Bryant, *The American Ideal*, “Introductory,” xx, 21 (「奴隸制」の語を含む一節の右余白にサイドラインもある)

- る) 18, 35 (一八〇七年以下の一節の右余白に二重のサイドラインがある)。
- (70) 蘇峰 徳富猪一郎「私の二つの念願」『蘇峯会誌』昭和十一年第三輯、昭和十一年十月、三二頁。昭和十一年八月十六日、大宮町での講演。
- (71) 徳富猪一郎『史論新集』民友社発行、明治書院発売、昭和十一年四月、三二八―三三〇頁。昭和十年十月十日、同志社大学での講演。
- (72) 蘇峰 徳富猪一郎「政治家としての西郷南洲先生」『改造』昭和十一年二月号、一八卷二五号、九五頁。なお同じ箇所で蘇峰はアメリカだけでなく、イギリスでもオリヴァー・クロムウェル (Oliver Cromwell) やウィクトリア女王 (Alexandrina Victoria) に関する多くの書物が出ていると紹介している。
- (73) 徳富『史論新集』三三〇頁、蘇峰生「日本精神と新島精神 第四 精神日本から精神米国へ」『東京日日新聞』昭和十年十一月五日夕刊。
- (74) 徳富『四時佳興』三〇八頁。
- (75) 蘇峰生「日米親和の鍵」『東京日日新聞』昭和九年五月二十二日夕刊、蘇峰生「第三者の口車に乗る勿れ 米国の識者に告ぐ」『東京日日新聞』昭和十一年二月十四日夕刊。
- (76) 以下は大正三年から七年にかけて蘇峰が展開したアジア・モンロー主義、日支同盟論の要旨(拙稿「第一次世界大戦期の徳富蘇峰とアメリカ」四五―四七、五八―五九頁)をもとに整理したものである。蘇峰は大正期のアジア・モンロー主義、日支同盟論の基本部分を日中戦争前の時期においても変えておらず、それをベースとして議論を展開している。ただし大正期のように自分のアジア・モンロー主義を改めて細説することはなく、それを当然の前提として日本の「特殊地位」を主張し、個別の意見を開陳していた。
- (77) 実際には「優先権」の語は用いていないが、主張の内容と文脈から判断する限り、蘇峰はそれと同様の概念を抱いている。
- (78) モンロー主義をとるアメリカが日本のアジア・モンロー主義を認めないのは不公平であるという蘇峰のような主張は当時の言論界の主流を占めるもので、そうした一見「もっともらしい議論」に反駁する者は稀であった。しかしジャーナリスト清沢汎はその例外的な一人であり、ロースヴェルト大統領が中南米への非干渉政策を打ち出したこと

により昭和八年末までにモンロー主義は大きな変化をとげ、かつてのモンロー主義は放棄されたといっても過言ではないと論じた。清沢はモンロー主義がそもそも好ましくない原則であり、とくに第一次大戦以後その貫徹は困難となり、本家のアメリカでも反省して改めようとしているのであって、日本の見習うべきはモンロー主義ではなく、これを改めようとするアメリカであると警告したのである。北岡伸一『清沢洌 外交評論の運命』中公新書、二〇〇四年増補版、一二二—一二四頁。日中戦争前、清沢と蘇峰の見解の相違、ギャップは大きく、日米開戦後の清沢はよく知られるように日記の中で痛烈な蘇峰批判をくり返すようになる。清沢は移民としてアメリカに渡り、仕事と勉学を続けながら同国の社会を自らの肌で感じ取るとともに、帰国後は政府と関係をもつことがなかったが、蘇峰は約一か月間のアメリカ旅行を除き、本稿でも例証してきたように活字文献を通じてのみアメリカを見続け、また政界、軍部に関係者、コネクションをもっていた。そうした違いは当然アメリカ観の相違となって表れることとなった。

(79) Jonathan G. Utley, "Franklin Roosevelt and Naval Strategy, 1933-1941, in *FDR and the U.S. Navy*, ed. Edward J. Marolda (New York: St. Martin's Press, 1988), 49; Sadao Asada, *From Mahan to Pearl Harbor: The Imperial Japanese Navy and the United States* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2006), 201.

(80) 小山久美子『米国関税の政策と制度 伸縮関税条項史からの一九三〇年スムート・ホーリー法再解釈』御茶の水書房、二〇〇六年、二一、一二—一三、一六、二五頁。

(81) 蘇峰生「世界の現状 旭日丘漫筆(二)」『東京日日新聞』昭和八年八月二日夕刊、徳富猪一郎謹撰「皇長子の御降誕」『東京日日新聞』昭和八年十二月二十四日夕刊、蘇峰生「世界の趨勢と国民的自助」『東京日日新聞』昭和八年七月八日夕刊。

(82) 小山「米国関税の政策と制度」一八一—一九、二五、一九七頁。

(83) 蘇峰生「空腹国と満腹国」『東京日日新聞』昭和十年七月三十一日夕刊。人口増大が日本の生存に圧力をかけているのならば産児制限を行うという手段も考えられるが、蘇峰は「産児制限には私、心から反対です」と述べている。「日本の先を考へてみれば、日本人の将来は大和民族が殖えて行くといふことが本当の強みなので、これを段々収縮して行くといふことになれば、これは大変国運の消長に関することなんです。」「徳富蘇峰先生と吉屋信子女史の女性問答」『婦人倶楽部』昭和十年三月号、一六卷三号、一一九、一二二頁。蘇峰の認識では(第一次)世界大戦後、世

界はむしろ險悪になり、とくに一九三〇年代には秩序破壊により「腕次第、力次第」の状態が現出されていた（蘇峰 徳富猪一郎「世界の模範国日本」『雄弁』昭和十二年一月号、二八卷一号、五一頁）。そのように見る彼にとって、生存競争の激しい弱肉強食の世界で生き残るためには人口の力がさらに必要であるとされたのである。

(84) 同右、蘇峰「世界の模範国日本」四九—五〇頁。

(85) Frank H. Simonds and Brooks Emery, *The Price of Peace: The Challenge of Economic Nationalism* (New York and London: Harper & Brothers, 1935). 蘇峰旧蔵書の主なものは通常、お茶の水図書館成實堂文庫、同志社大学今出川図書館徳富文庫などに収蔵されているが、この『平和の代価』はいずれにも収蔵されておらず、管見の及ぶ限りでは所在不明であり、蘇峰の書き込みを調査することはできなかった。

(86) *Ibid.*, 334-335, 338, Preface xii.

(87) *Ibid.*, Chapter XXIV. Japan, Chapter XXV. Manchuria, Chapter XXVI. Asiatic Peace, Conclusion.

(88) 蘇峰生「世界の不安と欧州の衰運（一）警世的二新著」『東京日日新聞』昭和十年八月二十一日夕刊。

(89) ただし『平和の代価』には蘇峰が紹介していない以下のような記述がある点に注意する必要がある。第一に同書は、アメリカの帝国主義的膨脹が第一次大戦を経て終わりを告げたことを指摘している。「世界大戦の到来前に、米西戦争より続いてきたアメリカの帝国主義の第二次爆発が静まった。かくして一九一八年、アメリカは戦利品として領土の分割を求めるようなことはなく」、アルメニアの委任統治はアメリカでは支持されなかった（*The Price of Peace*, 208）。この個所はアメリカが帝国主義的な海外膨脹政策を軌道修正し、方向転換したことを示す重要部分であるが、蘇峰はアメリカの帝国主義がやむどころか、それがアジアに拡大されるのは時間の問題であると思い込んでおり、そうした記述を受け入れることはなかった。第一次大戦後ひいては昭和戦前期においても蘇峰はアメリカをウィリアム・マッキンリー（William McKinley）、シオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt）時代と同様に捉え、その延長線上にあるものと見ていた。したがって昭和九年にアメリカでタイディングス・マクダフィー法（*The Tydings-McDuffie Act*）が成立し、十年後のフィリピン独立が承認され、昭和十年には独立準備政府が発足した際、彼は「アメリカ帝国主義」とは正反対の方向を示すこれらの画期的事件を、管見の及ぶ限りでは取り上げることがなく、つまり眼中に入れることがなく、さらに日米戦争が生じるとアメリカのアジア、世界「制覇の野望」を

声高く非難するようになるのである。第二に同書は、アメリカが中華民国をめぐって日本と戦争を行う意思をもたないことを指摘している。「アメリカ合衆国の国民は「門戸開放」を支持するために、あるいは中国の現状を守るために、戦争を始めるといふ意図は少しももっていない。」(The Price of Peace, 244)。これは当時のアメリカの現状を正しく伝えるものであったが、後述するようにアメリカが日本に海上権力抗争をしかけようとしているとの固定観念をもつ蘇峰は、自己の見解と逆になるこの部分に注目し、取り上げることがなかった。

(90) Sidney L. Gulick, *Toward Understanding Japan: Constructive Proposals for Removing the Menace of War* (New York: The Macmillan Co., 1935). 同志社大学今出川図書館徳富文庫所蔵の蘇峰旧蔵書。赤鉛筆により書き込みがなされている。

(91) ギューリックと同書については Sandra C. Taylor, *Advocate of Understanding: Sidney Gulick and the Search for Peace with Japan* (Kent, Ohio: The Kent State University Press, 1984), 189, 195-199 を参照。

(92) Gulick, *Toward Understanding Japan*, 25. 右余白にサイドラインが引かれている。

(93) *Ibid.*, 172. 左余白にサイドライン。

(94) *Ibid.*, 239. アンダーラインだけでなく左余白にサイドラインもある。

(95) *Ibid.*, 90-91 右余白に頁をまたがってサイドラインが引かれ、「アメリカ人はさらに次のことを悟る必要がある」から「愛国者が嘆くことの多い記録を示している」までの右余白に「此点要注意」と書き込まれており、蘇峰が大きい注目していることがわかる。

(96) この文字に限り赤ではなく黒鉛筆で記されている。

(97) Taylor, *Advocate of Understanding*, 197-198.

(98) 蘇峰生「寧ろ独逸に同情す」『東京日日新聞』昭和十年三月二十日夕刊。

(99) 蘇峰生「来る可きものは来た 日独防共協定に就て」『東京日日新聞』昭和十一年十一月二十七日夕刊。

(100) 蘇峰生「自主的外交の一端」『東京日日新聞』昭和十一年十二月四日夕刊、ならびに同右。

(101) 蘇峰生「善人は国の宝 旭日丘漫筆(一〇)」『東京日日新聞』昭和八年八月十八日夕刊、蘇峰生「寧ろ独逸に同情す」。

(102) 蘇峰「世界の模範国日本」『雄弁』昭和十二年一月号、五一頁。蘇峰「私の二つの念願」『蘇峯会誌』昭和十一年十月、三二頁。「在京会員座談会―蘇峰先生出席の上―」『蘇峯会誌』昭和十一年第四輯、昭和十二年二月、一〇五頁。昭和十一年十月三十一日、蘇峰会在東京会員座談会での蘇峰の時局談。蘇峰 徳富猪一郎「国民戦線人民戦線と我皇道精神」『蘇峯会誌』昭和十二年第一輯、昭和十二年四月、二三頁、昭和十一年十一月二十一日の講演筆記。

(103) 蘇峰「私の二つの念願」三三頁。

(104) 蘇峰は昭和九年三月十五日の講演において『わが闘争』中の「日本は文明の受用者で、創造力がなく、単に模範に止まる」とした個所を反駁したという。徳富猪一郎『老記者の旅』民友社発行、明治書院発売、昭和十二年五月、一〇頁。これは『わが闘争』でヒトラーが、日本の発展はアーリア人に負っているとし、日本人を指して「文化支持的」であるが「文化創造的」ではないとした一節に該当する。平野一郎、将積茂訳『わが闘争』上巻、角川書店、平成十年第四一版、四一四―四一五頁。以前、本稿の筆者は蘇峰が昭和十一年刊の英語版『わが闘争』(My Struggle)を日中戦争勃発直後(昭和十二年七月十三日)に読んだものの、それが原文を大幅に削除した抄訳であって右の部分も訳出されていなかったため、ヒトラーに敬意と共感を抱く蘇峰の感情は修正されることがなかったとした。拙著『近代日本人のアメリカ観』一六四―一六五、一七六―一七七頁。しかし実際には蘇峰は、英語版『わが闘争』を読んだ昭和十二年七月から三年余り前の九年三月の時点で、すでにヒトラーの日本人への偏見を見抜いていたことになる。

(105) 蘇峰「世界の模範国日本」『雄弁』昭和十二年一月号、四八―四九頁。

(106) 蘇峰生「横須賀瞥見」『東京日日新聞』昭和十一年十二月八日夕刊、蘇峰生「自主的外交の一端」『東京日日新聞』昭和十一年十二月四日夕刊。それとともに蘇峰はアメリカ、イギリスの自由、民主主義体制についても日本にそぐわないとし、自由とデモクラシーから生じる平等は、偉い人を見て自分もそうなりたいという向上的平等ではなく、偉い人を引きずり降ろそうとする向下的平等となり、その結果、デモクラシーの下では国家を喰い物にする者はいらぬが、国家のために奉仕する者がいなくなってしまうと批判している。蘇峰「世界の模範国日本」五二頁。独伊のファシズム、米英のデモクラシーを拒否する彼が唱えたのは、日本独自の皇道、天皇を中心とする和の世界であった。それによると、欧州諸国は力による征服と闘争、権力関係によって国家の組織を人工的に作ってきたが、日本はそれと

- 根本的に異なり、君主・親である天皇の下で臣下・子である国民が撫育と和順によってやって来た。日本は家族を拡大延長した倫理的な国家であり、和を大眼目とし、その皇道は満洲、シナ、ひいては宇宙を包み込むほど広く、この精神によって国家の見本を世界に示すべきであるという。蘇峰「世界の模範国日本」五四―五六、五八―六〇頁、蘇峰 徳富猪一郎「昨今の心境―壽康会茶話会席上挨拶―」『蘇峯会誌』昭和十一年第二輯、昭和十一年六月、六、九頁、蘇峰 徳富猪一郎「私の二つの念願」『蘇峯会誌』昭和十一年第三輯、昭和十一年十月、三五頁。
- (107) 蘇峰生「自主的外交の一端」『東京日日新聞』昭和十一年十二月四日夕刊。
- (108) 蘇峰生「The Spirit of Japan (日本精神)」『東京日日新聞』昭和十年二月七日夕刊、蘇峰生「日米親和の鍵」『東京日日新聞』昭和九年五月二十二日夕刊。
- (109) 註(60)で引用した高木訳「独立宣言」。
- (110) 蘇峰生「叩頭は無用 倫敦に於ける軍縮會議に付て」『東京日日新聞』昭和十年十二月十一日夕刊。
- (111) 蘇峰生「日米親和の鍵」『東京日日新聞』昭和九年五月二十二日夕刊。
- (112) 蘇峰生「日本の長き計企」『東京日日新聞』昭和八年八月十九日夕刊。満洲事変期の蘇峰による世界水平運動論については、拙著『近代日本人のアメリカ観』一三〇頁。
- (113) 蘇峰 徳富猪一郎「昭和日本の進路」『蘇峯会誌』昭和十二年第二輯、昭和十二年六月、四、七―八、一〇―一三頁、昭和十二年五月六日の講演筆記。
- (114) 同右、一三頁。
- (115) 蘇峰生「東亜弟民族に対する日本国民の態度と心情」『東京日日新聞』昭和十年九月十七日夕刊。
- (116) 拙著『近代日本人のアメリカ観』二〇一頁。
- (117) 蘇峰生「日米親和の鍵」『東京日日新聞』昭和九年五月二十二日夕刊、蘇峰生「日米親交の癌」『東京日日新聞』昭和九年四月十日夕刊。
- (118) 蘇峰生「欧米人は未だ十九世紀の迷夢から覚めず」『東京日日新聞』昭和九年十一月二十四日夕刊。
- (119) 蘇峰生「有力なる国民と微力なる政府」『東京日日新聞』昭和九年十二月四日夕刊。
- (120) 蘇峰生「叩頭は無用 倫敦に於ける軍縮會議に付て」『東京日日新聞』昭和十年十二月十一日夕刊、蘇峰生「咎め

- て其咎に倣ふ勿れ 優越権の濫用を戒めよ」『東京日日新聞』昭和十年十二月二十五日夕刊、蘇峰生「世界の公道に対する奉公 倫敦會議の成行」『東京日日新聞』昭和十一年一月十四日夕刊、蘇峰生「仁を求めて仁を得たり 倫敦會議の始末」『東京日日新聞』昭和十一年一月十七日夕刊など。
- (121) Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*, 187-188, 190. 陸海軍とコネクションをもつ蘇峰は、こうした海軍の論拠を何らかの形で知らされ、それに依拠して艦隊派的な言論を展開した可能性があるろう。
- (122) Pelz, *Race to Pearl Harbor*, 127.
- (123) Ibid.
- (124) Sadao Asada, *Culture Shock and Japanese-American Relations: Historical Essays* (Columbia and London: University of Missouri Press, 2007), 148.
- (125) 蘇峰生「対米政策 好意は好意 準備は準備」『東京日日新聞』昭和八年十一月七日夕刊。
- (126) 拙著『近代日本人のアメリカ観』八九一九〇、一二二―一二三頁、蘇峰生「叩頭は無用 倫敦に於ける軍縮會議に付て」『東京日日新聞』昭和十年十二月十一日夕刊。
- (127) 「講演 東洋平和の番人たる日本の国防 夜の七時半から 徳富猪一郎」『東京日日新聞』昭和九年十二月三日ラジオ番組欄、蘇峰生「何んぞ優越感を抛たざる 軍縮會議の前途」『東京日日新聞』昭和十年二月十九日夕刊、蘇峰生「叩頭は無用 倫敦に於ける軍縮會議に付て」『東京日日新聞』昭和十年十二月十一日夕刊。
- (128) 蘇峰生「世界の公道に対する奉公 倫敦會議の成行」『東京日日新聞』昭和十一年一月十四日夕刊、蘇峰生「仁を求めて仁を得たり 倫敦會議の始末」『東京日日新聞』昭和十一年一月十七日夕刊。
- (129) 日中戦争期の蘇峰については、拙著『近代日本人のアメリカ観』前編第五章。
- (130) マハンについては主として、麻田貞雄「歴史に及ぼしたマハンの影響―海外膨張論を中心に―」麻田貞雄訳・解説、アメリカ古典文庫8『アルフレッド・T・マハン』研究社出版、一九八九年第五刷所収、麻田貞雄『両大戦間の日米関係―海軍と政策決定過程―』東京大学出版会、一九九三年を参照した。
- (131) 拙稿「徳富蘇峰の大日本膨脹論とアメリカ―明治二十年代を中心に―」『同志社アメリカ研究』第四一号、二〇〇五年三月、四七―四九頁、「日露戦争前の徳富蘇峰とアメリカ―明治三十年代を中心に―」(一)(二)完『法学研

- 究」八〇巻一〇号、一一号、平成十九年十月、十一月、「第一次世界大戦期の徳富蘇峰とアメリカ」三九—四二頁。
- (132) 不承認主義を明らかにしたヘンリー・L・スティムソン (Henry Lewis Stimson) 国務長官は米海軍主力の太平洋集中によって日本に威圧を与え、その行動を牽制しようと考えた。昭和七年二月、アメリカ海軍は毎年慣例であった両洋艦隊の合同演習を実施したが、それは偵察艦隊が大西洋からパナマ運河経由で太平洋に入り、ハワイを根拠地とする戦艦艦隊と合同するもので、演習終了後も偵察艦隊は太平洋に残留し、これに刺激されて日本国内に流れる日米戦争の風説はさらに盛んとなった。秦『太平洋国際関係史』二〇八—二一頁。この米艦隊の動きを振り返った蘇峰は、そうした日本への威喝に対して日本海軍が微弱で勢力均衡上、不利であれば、我らはいかなる憂き目にあつたであろうと振り返る。蘇峰生「太平洋波高幾丈 海軍力の充実」『東京日日新聞』昭和八年十一月二十八日夕刊。
- (133) 蘇峰生「無用の造艦競争 米国の反省を促す」『東京日日新聞』昭和八年七月十八日夕刊。
- (134) 蘇峰生「太平洋波高幾丈 海軍力の充実」『東京日日新聞』昭和八年十一月二十八日夕刊。
- (135) 同右。
- (136) 蘇峰生「満洲問題 急にす可きものあり 緩にす可きものあり」『東京日日新聞』昭和八年八月二十九日夕刊、蘇峰生「有力内閣」『東京日日新聞』昭和八年九月二十三日夕刊。
- (137) 蘇峰生「対米政策 好意は好意 準備は準備」『東京日日新聞』昭和八年十一月七日夕刊。
- (138) 蘇峰生「欧米人は未だ十九世紀の迷夢から覚めず」『東京日日新聞』昭和九年十一月二十四日夕刊。
- (139) See, Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*, 201. 政権を担当した初日からローズヴェルトは日本との戦争の危険について懸念し、昭和八年五月七日の閣議で「短期的には敗北、最終的には勝利」との見地から日本との戦争を議論した。Pelz, *Race to Pearl Harbor*, 75. またローズヴェルトはアメリカの国益を損なうような挑戦が日本から来るであろうとこの時点で米海軍と意見が一致しつつあった。Uley, “Franklin Roosevelt and Naval Strategy, 1933-1941,” 49.
- (140) Waldo Heinrichs, “FDR and the Admirals: Strategy and Statecraft,” in *FDR and the U.S. Navy*, ed. Edward J. Marolda (New York: St. Martin's Press, 1998), 118.
- (141) Pelz, *Race to Pearl Harbor*, 70, 78; Edward S. Kaplan, *American Trade Policy, 1923-1995* (Westport, Con-

- necticut: Greenwood Press, 1996), 38; George W. Baer, *One Hundred Years of Sea Power: The U.S. Navy, 1890-1990* (Stanford, California: Stanford University Press, 1994), 129. アメリカのGNPは昭和十二年まで昭和四年のレベルに回復しなかった。Kaplan, 38.
- (142) Baer, *One Hundred Years of Sea Power*, 129-130; Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*, 204-205, 188; Heinrichs, "FDR and the Admirals," 119-120
- (143) Heinrichs, "FDR and the Admirals," 118-119; Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*, 201.
- (144) Baer, *One Hundred Years of Sea Power*, 121. アメリカ政府は海軍の行動の準備をせず、それを考えようとしていなかった。つまり一九三〇年代半ばにおいてアメリカは実際には太平洋の戦略をもたなかったのである。Ibid., 122, 128.
- (145) Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*, 187.
- (146) ちなみに蘇峰にとってアメリカに対する軍事力強化は、アメリカとの親交と矛盾するものではなかった。むしろ軍備の充実によってアメリカの「野心、脅迫」を抑制し、太平洋を平和の海にすることができると考えたのである。アメリカとは戦いたくないが、アメリカが日本に海上権力抗争を挑むため、やむをえず対抗措置を取らざるを得ないというのが蘇峰の本心であっただろう。「太平洋をして其名の如く太平ならしむるは、我等の理想だ。……〔その実現のためには〕我に実力ありて、始めて共に平和の保障が出来る」というのである（蘇峰生「太平洋波高幾丈 海軍力の充実」『東京日日新聞』昭和八年十一月二十八日夕刊）。軍事力に関する彼の基本的な考えとは「軍備は本来、戦をしないためのものである」というものであった。孫子が百度戦って百度勝つのでなく、戦わずして敵を屈服させるのが最上だとしたように「孫子」謀攻篇、力を蓄えて濫用せず、維持したままで目的を達成するのがふさわしいと彼は述べている（蘇峰 徳富猪一郎「力及び力の使用法」『実業之日本』昭和十一年一月一日号、三九卷一号、三三三頁）。
- 他方蘇峰は、自分は「無用なる造艦競争を、好まない」としているが（蘇峰生「無用の造艦競争 米国の反省を促す」『東京日日新聞』昭和八年七月十八日夕刊）、皮肉なことに彼の主張するようなアメリカとの軍備平等要求は、逆にアメリカの対日猜疑心を触発し、同国の軍備増強と日米建艦競争を引き起こしかねないことになった。ローズヴェ

ルト大統領は、日本のパリテイ要求を受け入れることは中国の門戸開放と九カ国条約に対する日本の侵犯を許すことに等しくなると感じ、ロナルド・リンジー (Ronald Lindsey) 英大使に、もし日本がパリテイを主張し、諸条約の廃棄を通告するならば、自分は海軍の目的のため五億ドルを議会に要求するであろう、日本人はアジアにおける帝国拡張の遠大な計画を推進していると述べた (Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*, 2011)。蘇峰は主観的には日米平和を望み、その実現のために海軍軍備の平等を訴えたが、そのような類の主張はアメリカ側に日本の東アジア支配の野望を裏付けるものと解釈される結果となった。

(147) 以上加藤につづいては、Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*, 38-40. 同書によると、加藤がマハンを熱心に読んだかどうかは不明であるというが、一九二〇年代から一九三〇年代初めの主張には明らかにマハン思想の痕跡が認められるという。

(148) 財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団・徳富蘇峰記念館には明治末年から昭和戦前にかけての加藤寛治の蘇峰宛書簡が八通保存されているが、そこにはアメリカや軍事知識に関する内容は記されていない。

(149) 蘇峰生『皇国の危機 一九三六年に備へよ』『東京日日新聞』昭和八年十二月十四日夕刊。

(150) 関根郡平『皇国の危機 一九三六年に備へよ』兵書出版社、昭和九年一月十五日第八版、三〇―三一、七、一四一、二一九―二二五、二三九、二四四頁。

(151) 同右、二〇九―二一〇頁。

(152) 関根は同右書において次のように記している。徳富猪一郎氏の言葉を借りていえば、大海軍さえ建造すれば日本は蠅螂の斧をもって米國に立ち向かう敵愾心を消亡すべしと速了するがときは、日本の国民的心理に対する錯覚の骨頂である (二〇九頁)。たとえ建艦競争が起ころうとも、日本国民は必死の覚悟で最後の一銭まで建艦費に寄進するであろう (四一五頁)。ここで関根のいう「徳富猪一郎氏の言葉」とは、蘇峰生「無用の造艦競争 米國の反省を促す」『東京日日新聞』昭和八年七月十八日夕刊から引用したものである。

(153) 蘇峰生『躍進日本と海洋発展』『東京日日新聞』昭和十一年七月二十九日夕刊。その他にも近世日本国民史五十卷 (普及版) 刊行披露会 (昭和九年九月二十八日) が行われた際、関根はこれに出席し (『刊行披露会 帝國ホテルの盛宴』『蘇峯會誌』第五年第二輯、昭和九年十月、七三頁)、東亜調査会主催の講演会 (昭和十二年一月二十九日)

で関根が講師を務めた際、蘇峰（東亜調査会会長）も出席して挨拶を行う（蘇峰先生動静 自昭和十一年十二月一日至十二年三月十日）『蘇峯会誌』昭和十二年第一輯、昭和十二年四月、七六頁）など、両者の接点は途切れることがなかった。

なお蘇峰は日本のシー・パワーとしての発展のみを祈願したわけではなかった。彼によると、台湾、朝鮮を統治し、「兄弟国」として満洲をもつ日本帝国は「水陸両棲国」であり、外に向かって「大陸海洋両政策の遂成」に努めることが必要であるとされた。シー・パワー兼ランド・パワーとして日本は対外発展しなければならないのである。蘇峰生「人物本位」『東京日日新聞』昭和十一年一月三十日夕刊、蘇峰生「台湾総督問題」『東京日日新聞』昭和十一年六月十六日夕刊。また蘇峰は海軍力を補うものとして空軍力にも注目している。昭和八年五月、彼は三方ヶ原（現、静岡県浜松市内）の陸軍飛行第七連隊を訪問し、二名の将校から格納庫、飛行場の説明を受け、飛行機離陸の実況を見学している（長谷川藤太郎「浜松地方支部の発会と視察探勝随伴の記」『蘇峯会誌』第四年第二輯、昭和八年八月、六二頁）。このとき蘇峰は実際に爆撃機を見て強い感銘を受けた。飛行第七連隊は満洲、上海、熱河での実戦に参加したばかりであり、ここで彼は、今後の戦争では空軍が重要になるとの思いを深め、ロンドン軍縮予備会商の終了後は空軍力の強化を改めて強調し、自分は「我が帝国の空界の準備を絶叫する」と主張している。蘇峰生「駿の海、遠の山 四、三方原と飛行場」『東京日日新聞』昭和八年六月四日夕刊、蘇峰生「守りは九天の上であり 航空事業に就て」『東京日日新聞』昭和十年三月十七日夕刊、蘇峰生「過去の偉勲と将来の準備」『東京日日新聞』昭和十年五月二十八日夕刊。

(154) 藤原銀次郎『工業日本精神』日本評論社、昭和十年十一月。

(155) 蘇峰生「藤原銀次郎君の『工業日本精神』を読む」『東京日日新聞』昭和十年十一月二十六日夕刊。

(156) 蘇峰生「近衛内閣に望む」『東京日日新聞』昭和十二年六月五日夕刊。